２０２４年１月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１９日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、令和６年能登半島地震の報道についての報告と、「ＮＨＫ経営計画2024-2026年度」の概要の説明があり、議事に入った。

会議では、まず、さいたま放送局の取り組みと今後について報告があった。その後、首都圏ネットワーク「埼玉発！芸術が街を変える」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	泉田	佑子（書家）
副委員長	田中	裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
委員	飯島	禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	石塚	愛（横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト）
	金丸	博子（ファームサポート千葉合同会社　代表）
	坂内	剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	鈴木	美穂（認定ＮＰＯ法人マギーズ東京　共同代表理事）
	轟	直希（長野工業高等専門学校　工学科都市デザイン系准教授）
	中村	敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田	千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜首都圏ネットワーク「埼玉発！芸術が街を変える」
（総合　１１月６日(月)～１０日(金)放送　＜東京・神奈川・千葉・埼玉＞）
について＞

○　日替わりでテーマを設定することで、さまざまな角度から芸術に触れることができ、興味深かった。中継とＶＴＲを組み合わせた構成だからこそ、短い時間の中で情報が伝わり、おおかた満足した。ただし、３日目の魚拓を取り上げたコーナーで、魚拓に

ついての簡単な解説があるとなおよかった。また、手話演劇を紹介する企画で、アナウンサーが字幕放送の活用を呼びかけていたが、耳が不自由な人に向けたことばであるならば、テロップで伝えるべき内容ではないかと思った。中継では、「全国高校生手話パフォーマンス甲子園」で準優勝したろう学校の生徒が出演していたが、手話演劇のパフォーマンスはＶＴＲで紹介していた。手話演劇を目にする機会は限られているので、中継の中で生のパフォーマンスを見たかった。インターネットの動画で見たところ、メッセージ性があり大変すばらしかったので、もう一歩踏み込んで取り上げられなかったことを残念に感じた。

○　「さいたま国際芸術祭」とはどのようなものなのかが分かりにくかった。また、さいたま市と芸術との結びつきを２日目の放送で紹介していたが、１週間のシリーズで芸術を取り上げるのであれば、１日目に紹介があるとスムーズな導入になったのではないか。手話演劇のコーナーは、テロップや手話通訳者の解説があることで分かりやすく理解できたが、もう少し長く見たかった。また、全盲の写真家である白鳥建二さんの作品は、テレビの画面越しでは芸術的なインスピレーションが伝わりにくかった。全体的には、中継の部分でよりライブ感のある演出があるとなおよかったと思う。独自のテレビ電波を持たない南関東３局（横浜局、千葉局、さいたま局）が週間を通して各県のシリーズを組むことはよい取り組みだと思うので、今後も続けてほしい。

○　芸術を軸とした日替わりのテーマ設定はよかったが、日ごとの内容に濃淡があると感じた。３日目の「芸術×インバウンド需要」の内容は興味深かったが、魚拓や盆栽が埼玉の地域性とどのようなつながりがあるのか、解説があるとより分かりやすかった。４日目の「多様な表現で社会とつながる」が最も印象的で、アートに関心のある人が福祉について考えるきっかけにも、福祉に関心のある人がアートのすばらしさを知るきっかけにもなったと思う。特に手話演劇のコーナーは、音声がないことでことさら真剣に見入ってしまった。パフォーマンスのＶＴＲを見せる前に、実演を交えて手話によるダイナミックな感情表現を解説したことにより、関心や理解が深まった。濃密な内容で、もう少しじっくりと取り上げられるとなおよかった。南関東３局が１週間のシリーズ企画で伝えられる機会はなかなかないと思うので、地域の視聴者に喜ばれたのではないか。埼玉県近郊に住む人たちも足を運びたくなる内容で、有意義だった。

○　日を追うごとに徐々にローカル色のあるトピックに展開していて、興味深かった。次に紹介する話題の内容を右下にテロップで表示するなど、話題や場面が転換するタイミングでの演出上の工夫もよかった。埼玉県になじみがない人でも、放送日ごとに設定されたテーマから理解を深めることができ、それぞれのテーマどうしのつながり

も感じた。３日目の放送で“カラー魚拓”の体験者数を紹介していたが、その数をどのように評価すればよいのかが分かりにくかったので、芸術をタッチポイントとしたインバウンドの需要がどの程度あるのか、前提の説明があるとよかった。また、“盆栽作家”と“盆栽技師”という２つの表現があったが、その違いが理解できず残念だった。４日目の手話演劇の企画では、表情や体を使ったダイナミックな表現に圧倒された。ＶＴＲのテロップなども適切で、ストーリーがしっかりと伝わってきた。福祉施設のアトリエの企画では、支援が必要な人たちが自由に表現できる居場所づくりがされていて、芸術を通じて社会がうまく循環していると感じた。いずれの企画も人に焦点を当てていて、「芸術が街を変える」というよりは「芸術により人の視点が変わる」のようなタイトルが適切なのではないかと感じた。

○　「さいたま国際芸術祭」を紹介するのであれば、それに関わる海外の人たちの情報があると、より引き込まれる内容になったのではないか。手話演劇の企画は、耳が不自由な人たちを身近に感じられる内容だったが、もう少し長く時間を取れるとより伝わったと思う。中継とＶＴＲによる構成は大変よかった。中継は生の声と臨場感を届けられ、ＶＴＲは伝えたいことをしっかりと時間を使って発信できる。ＶＴＲを中継の後に置く構成も効果的だと感じた。全体を通して、アナウンサーが出演者たちの思いを端的に分かりやすく伝えていたこともよかった。夕方の放送時間帯で、テレビの前でゆっくりと見られる人は少ないのではないかと思う。シリーズで放送することで、関心を持った視聴者がＮＨＫプラスで過去の放送をさかのぼることができるので、１週間を通したこのような企画はよい取り組みだと感じた。

○　手話演劇を生中継でもう少し長く見たいという意見は同感だ。ＮＨＫだからこそできる演出で手話演劇を見せることで、社会とのつながりの構築にともに挑戦するような内容であればさらによかった。

（ＮＨＫ側）

手話演劇を生中継で見せることについては、手話の内容と放送の字幕などにそごがないようにしたいという点から、慎重になったという事情がある。もっと深く取材し、時間をかけて伝えることが大事だったかもしれない。今後またチャレンジしていきたい。「国際芸術祭」を取り上げているにもかかわらず、国際的な視点が不足しているという指摘を頂いた。海外との接点について、全体像を示したうえで個別の具体例を紹介できるとより分かりやすかったと思う。中継では、型にはまりすぎず、より臨場感のある伝え方ができるよう、今後さまざまな工夫を

していきたい。

○　アクシデントも含め、ライブならではの臨場感は中継番組の魅力だ。ＮＨＫの中継番組は、しっかりと段取りをこなすことを重視するという印象を持っている。生放送で伝えることの妙味をより意識してはどうか。

○　手話の内容が仮に正確に伝わらなかったとしても、むしろそれがリアルでよいと思う。手話のコミュニケーションの難しさや臨場感を共有できるような番組作りができるとよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

何かあってもリカバリーができる程度に深く取材をしていれば、生中継でも臨機応変にどのような対応もできるはずだ。そのような心持ちで臨みたい。

○　芸術というテーマに興味を引かれた。かわいらしいオープニングのアニメーションにも引き込まれた。短い時間の中で、それぞれの放送日のテーマがはっきりと分かり、飽きずに見ることができた。ＳＮＳなどで放送後にフォローができると、より理解が深まるのではないか。また、福祉施設の話題では、障害のある人が自立に至るまでの苦労についても触れられるとなおよかった。全体を通して、埼玉県の魅力を伝え、近郊の人たちが足を運びたくなる内容だった。観光資源に限りがある中で、伝統芸能、盆栽、魚拓などで成果を上げているという話題は埼玉らしさを感じ、埼玉県についての理解が深まった。

○　埼玉県に芸術というイメージがなかったので、何か大きなプロジェクトが始まったのだろうかと心が躍った。芸術に関するトピックをさまざまな角度から取り上げていて、一つ一つのエピソードから、芸術が暮らしの中で重要な役割を担っていることが理解できた。特に手話演劇の企画は、思いを伝えたいという高校生たちの気持ちがしっかりと伝わってきて、生放送の利点を感じた。手話とともに表情を変えることで感情を表現していて、人への伝え方という点でも学びのある内容だった。１週間集中して放送することで、埼玉県が持つ芸術の力を表現できていたと思う。また、芸術で表現している人たちの生き生きとした姿はすがすがしく魅力的で、物質的な豊かさだけでなく心の豊かさが大切だということに気付かされた。ただし、中継でアナウンサーが話す専門用語が理解できないことがあったので、テロップで補足があればより分かりやすかったと思う。

○　芸術をテーマにした点は大変よいと思う。芸術分野に興味がない人も、「首都圏ネットワーク」の特集として目にすることで、新たな情報を得る機会になったのではないか。手話演劇の企画は、日常の中では気付かないことを学べるよいテーマだった。中継とＶＴＲを組み合わせた構成は分かりやすく、臨場感もあり、時間配分もちょうどよく感じた。ただし、複数の場面でカメラワークが安定せず、映像が大きく揺れていることが気になった。また、一部、テロップの表示時間が短く読めない部分があった。南関東３局が１週間を通して各県のシリーズを組むことには賛成だ。他県に住む人も興味を引かれるようなテーマで、地域の新たな魅力が伝わるようなシリーズを放送してほしい。

○　タイトルのデザインやＢＧＭがかわいらしく、好感を持った。１週間のシリーズで放送したことで、埼玉県に住む人たちに喜ばれたと思う。５日間の内容は多彩だったが、個人に焦点が当たりすぎているように感じ、「芸術が街を変える」というタイトルが適切だったのかは疑問に感じた。また、手話演劇のパフォーマンスはすばらしかったが、手話通訳者の立ち位置が気になった。手話は目で見る言語なので、話す相手とできるだけ正対することが望ましい。今回は、高校生たちが通訳者と横並びの位置にいて、左を向いている場面が多かった。通訳者がカメラ側に立っていれば、高校生たちは正面を見ていたはずだ。生中継という緊張した状況下で安心して臨んでもらうためにも、手話がよく見えるような配慮が必要だったと思う。

○　芸術という答えのない分野に挑戦したことはすばらしいと思う。ただし、全盲の写真家が撮影した写真を健常者の視点で選んでいることが気になった。写真に対する街の人の声が限定的で、肯定的な意見のみであることにも偏りを感じた。受け入れがたいという意見を認めることも、現代アートの鑑賞における重要なポイントになると思う。また、ろう学校の生徒を体育館の白線に沿って１列に並ばせたり、子どもたちが狭い部屋で窮屈そうに獅子舞を披露していたりしたことは、出演者への配慮が十分ではないように感じた。芸術を通して育まれる教養と人々の心のつながりが「街を変える」ことが伝わったのであれば、意義のある番組だったと思う。視聴者からどのような反響があったのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

手話通訳者の立ち位置などについて、出演者へのより深い配慮の必要性を感じた。真摯（しんし）に受け止めたい。１週間を通して埼玉県の話題を取り上げることについては、おおむね好意的な意見を頂いた。今後も、埼玉県に住む人たちだけでなく、近隣に住む人たちも関心が持てるような企画を考えていき

たい。さいたま放送局のＳＮＳなどを活用して情報をフォローしていくことの必要性も感じた。また、今後は安定したカメラワークでしっかりと伝えられるようにしたい。

○　芸術を取り扱うことは、ひとりの命への向かい方を取り扱うことだと個人的には思うので、より芸術への理解を深め、人々の心を動かす創造的な番組を届けてほしい。

＜放送番組一般について＞

○　令和６年能登半島地震では、新潟県にも生活に支障をきたすような被害が出ている。取り残されないように報道を続けてほしい。大きな災害が発生した際は、ＮＨＫプラスで地域放送をリアルタイムで見られるようにしてはどうか。避難の際の安心感につながると思う。

○　近年、津波の危険があるときに、画面上に「つなみ！にげて！」というやさしい日本語や、「ＥＶＡＣＵＡＴＥ！」という英語を表示している。能登半島地震の報道では、外国人向けの情報だけでなく、手話でも情報を発信していて、多様性に富んだ対応がすばらしいと感じた。ＳＮＳでも、やさしい日本語によるニュースや、２１種類の言語によるニュースサイトの情報などを発信していて、安心につながると思った。多様な言語を母語とする人が日本で暮らしていることを踏まえると、放送でも多言語で避難の呼びかけをすることや、ＳＮＳでの頻繁な多言語発信が必要だと思う。また、「つなみ！にげて！」「ＥＶＡＣＵＡＴＥ！」の文字の横に津波のような絵を表示しているが、インパクトが弱いように感じる。災害報道における多言語への対応について、取り組みや展望を聞きたい。

○　能登半島地震の報道では、正確かつ的確な情報発信をしていると感じた。被災地には現在も支援物資が届けられているが、避難場所によっては不要な物があふれているという話も聞く。刻々と状況が変わる中で、被災地で本当に必要とされているものをしっかりとくみ取って伝え続けてほしい。

○　能登半島地震の発生日、ＮＨＫはいち早く災害報道への切り替えをしていた。珠洲市のライブカメラの映像からは、地震の大きさや恐ろしさが伝わってきた。アナウンサーによる津波からの避難の呼びかけは、緊迫感や必要な情報がしっかりと伝わる口調だった。特に高齢者にとって、災害時のテレビの存在は重要であり、ＮＨＫが果たした役割は大きかったのではないか。比較的早い段階から手話や英語による発信もし

ていたが、震源の近くではそれでも間に合わない可能性があるので、さらなる改善の余地があると感じた。また、年始の時期でもあるので、交通情報が分かりやすく伝わる形であればなおよかった。民放各局と比べて、ヘリコプターによる映像が遅かったことも気になった。

○　避難を呼びかける段階から、災害情報を正確に伝える段階への移行のタイミングは難しい。その時々で最も必要とされる情報を考え、限られた画面と音声の中で工夫をしてほしい。

○　地震発生時、北陸地方の高速道路で車を運転していた。運転しながら揺れを感じ、ＮＨＫの放送をすぐに受信した。緊迫した内容の呼びかけを続けていて、大変分かりやすく、訴えるものがあった。放送から切迫感が伝わり、すぐに避難の準備を始めたが、通行止めで身動きがとれなくなってしまった。そのような状況で、道路交通情報を取得することが大変難しいと感じた。

○　最近、防災・減災をテーマとしたＮＨＫの講演を聞く機会があった。近隣地域で「南海トラフ巨大地震」以上の大きな地震が起こりうる可能性を初めて知り、衝撃を受けた。講演では、アナウンサーによる「命を守る呼びかけ」についても紹介があった。日常的な訓練や詳細なマニュアルにより、常に災害報道の準備をしているということだった。今回の報道では山内泉アナウンサーの呼びかけが話題になったが、そのような日々の訓練の成果だと思う。これからも、講演などの場でＮＨＫの災害報道の取り組みを広く伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

山梨県では地震による被害想定の見直しがあり、県内向けのニュース番組の映像も活用して講演で伝えた。次回の開催を希望する声も頂いているので、検討したい。

○　避難を呼びかけるアナウンサーの口調が強く、非常事態だと認識できた。各メディアに対してもよい見本になったのではないか。賛否両論があったそうだが、多くの人が放送を見てすぐに避難を決めたことで、命が助かったという話を聞いた。どのような意見があろうとも、人命を救えたことは称賛に値すると思う。今回の報道で、災害の状況や取るべき行動をリアルタイムで的確に伝えるテレビ放送は貴重だと、改めて気付かされた。

○　緊急地震速報が出てからの対応が早く、ＮＨＫへの信頼を感じた。手話による発信

や、外国人に向けて情報を提供するＱＲコードの表示もあった。アナウンサーが通常とは明らかに異なるトーンで避難を呼びかけていて、それによって命を救われた人も多いのではないかと思った。健康を保持するための情報や、避難生活に役立つ情報なども多く届けていた。大相撲など、避難生活で楽しめる番組を届けることの大切さも感じた。ただし、情報は届かなければ意味がない。今回の災害で、テレビ、ラジオ、ＮＨＫプラスはどのように機能したのか。インフラの寸断などから地上波放送が見られない地域に向けて、衛星放送で金沢局の地域向けニュースなどを伝える臨時対応もあった。それらも含めて検証し、災害時に情報が確実に届けられるように努めてほしい。

○　元日からどこよりも長く能登半島地震の報道をしていた。アナウンサーがどのメディアよりも感情を込め、緊迫感の伝わる声で避難を呼びかけていて、今後の災害報道を変えるきっかけにもなったと思う。「つなみ！にげて！」「ＥＶＡＣＵＡＴＥ！」という大きな表示や、デジタルでのきめ細かい情報発信を見て、命を助けるための役割を果たしていると感じた。災害時にＮＨＫを視聴する習慣がある人は多いので、インターネット上での放送のリアルタイム視聴もニーズがあると思う。テレビがなくても災害時にはここにアクセスすればよいというデジタル上のサービスが広く周知されていると、助けられる人がより増えるのではないか。

○　あらかじめ連携をとっている全国の視聴者から情報を集め、信頼性のある生の情報をすぐに伝えられるような仕組みがあるとよいと思う。ＳＮＳの情報は信憑性の面でリスクを伴うが、そのような仕組みがあれば、現状の体制では手が届かない情報を発信できるのではないか。

○　昨今、Ｊアラートの発出に慣れてしまい、重大に捉えられなくなってきているように感じる。Ｊアラートなどの有事の際の情報発信のしかたについても、今回の災害報道を踏まえて検討してほしい。

○　地震発生時、石川県の近隣地域の詳しい情報を得ることが困難だった。東日本大震災の際にも、茨城県の情報は大津波警報が出ているにも関わらずなかなか得られなかった。震源に近い地域と比べると被害は小さいが、当事者は居たたまれない気持ちになる。この地域は無事だという情報があると安心できると思う。

○　石川県の被害が甚大なことは承知しているが、新潟県に住む人にとっては、地元の情報が早く欲しい。新潟県では、発災から２時間後に県内向けのニュースを伝えていて、災害時のローカル放送の重要性を強く感じた。可能であれば、全国放送からの切

り替えがもう少し早いとよいと思う。また、ＮＨＫプラスでも地域放送をリアルタイムで見られるようにしてほしい。

○　発災からわずか２週間で、新潟県内向けに特集番組を放送していた。過去の災害でＮＨＫの報道に不足を感じたことがあったが、被災者の不安に寄り添い、今後の災害への備えの必要性を感じさせる意義のある内容で、役に立った。柏崎刈羽原子力発電所の再稼働にも地震の影響があるかもしれないので、一連の報道を注視したい。

（ＮＨＫ側）

新潟県にも甚大な被害があった。新潟局では地震発生直後から緊急で態勢を組み、現在も報道を続けている。まずテレビとラジオの全国放送で新潟県内の情報を伝え、発災から２時間後には県内向け放送を開始した。翌日の午後７時まで２７時間にわたり、地域情報を発信し続けた。さまざまな現場から生中継で伝えたほか、事前に災害時の連携協定などを結んでいる関係各所の情報も活用し、津波の遡上（そじょう）する映像や生活情報を届けた。ライフラインについては、１月１４日までの２週間で 204 回の放送を出している。今後も、新潟県に住む人たちのためにしっかりとした報道を続けたい。

（ＮＨＫ側）

何が必要な情報なのかを大切に考え、取材を重ねている。柏崎刈羽原発への影響も含め、伝えていきたい。

（ＮＨＫ側）

外国人向けには、発災直後から英語による放送を続けたほか、インターネット上でも日本語を含め２０言語のニュースを発信した。被災地域には主に４か国の在留外国人が多く暮らしているので、その人たちを中心に在留外国人に向けたホームページを立ち上げているところだ。また、ＮＨＫには、多数の外国人支援団体や自治体とのつながりがある。それらの団体のＳＮＳでニュースサイトの存在を発信してもらうことで、情報が広くシェアされることを目指すという対策を講じた。

アナウンサーの呼びかけについても意見を頂いた。災害は一つ一つ特徴が異なり、できたことと反省すべきことが常に

ある。東日本大震災の教訓を踏まえ、何度も訓練を繰り返し、改善を重ねてきた。

交通情報や地域の情報が欲しいという話があった。災害時には膨大な情報が流れるので、取捨選択の判断が難しい。今回の災害では、被害の状況が見えてくるにつれて、報道のポイントを次々に変化させていった。どうしても命を守ることが先行するので、交通情報などについては遅れがあったかもしれない。これからの糧にしていきたい。

今回の災害では、インフラに壊滅的な被害があり、今もなお復旧していない地域が多くある。放送各社や通信事業者の設備にも大きな影響があり、ありとあらゆる方法で情報を発信した。情報の活用のされ方を検証し、今後に生かしていく。

デジタルでは、今回は大津波警報が出るなどしたため、ＮＨＫプラスを自動的にニュースのライブ配信に切り替え、全国放送は同時配信で視聴できる状況だった。ＮＨＫのインターネット活用業務の必須業務化の議論も視野に入れつつ、地域放送についても配信をしていきたい。今回は、金沢局の地域放送をＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢで視聴できるようにする措置を緊急で行った。

携帯電話やスマートフォンは動画再生によって電力を消耗するので、ラジオをインターネットで聞けるようにした。スマートフォンの画面を暗くした状態でラジオを聞くと、消費電力が大幅に抑えられる。今後も、被災地の状況に応じた最適な届け方を考えていきたい。

（ＮＨＫ側）

災害報道を立ち上げた段階では、画面上に「石川県能登地方大津波警報」という“Ｌ字画面”を表示していたが、新潟県に住む人たちへ新潟県の津波警報を伝えるため、県内向けの“Ｌ字画面”を緊急で立ち上げた。新潟局のホームページでも、データを軽量化するために写真を非表示にして、“Ｌ字画面”の情報を見られるようにした。テレビのニュースでカバーしきれない情報を“Ｌ字画面”で伝え、それをデジタルにも展開し

た。新潟県だけでなく、交通への影響などがあった長野県内向けにも同じような対応を取った。

発災直後は全体像を把握するための情報が必要だが、居住地域の情報も必要になってくる。今回の報道で不足していた点を検証し、次に災害が発生した際には、全体情報と地域の情報とのベストなバランスを考え、地域に寄り添った情報発信をしていきたい。

○　１月１２日(金)の茨城スペシャル「あなたの街にも外国人　茨城の未来は？」を見た。ＮＨＫプラスも活用して視聴した。タイムリーな話題で、番組冒頭で全体像が分かる構成がよかった。茨城県の農業を支えるには、外国人労働者の存在が必要不可欠だと説明したうえで、外国人とともに働く人の本音をしっかりと伝えながら、制度変更の問題点に迫っていた。外国人を支援することは、茨城県の未来を支援することでもあるという話に納得した。茨城県小美玉市について「６％が外国人」と紹介していたが、県内各市町村の情報もあるとより分かりやすかった。また、“技能実習制度”から“育成就労制度”へと変わる背景について、もう少し丁寧な説明があるとなおよかった。次回は製造業で働く人たちも取り上げてはどうか。

（ＮＨＫ側）

茨城県に住む人たちは、生活の中で外国人の存在を身近に感じる機会が多い。彼らの思いや外国人との共生について、取材を継続していきたい。

○　１月１５日(月)の「ほっとぐんま６３０」を見た。群馬県内の避難所の課題を伝えていた。群馬県に住む人たちは、群馬県は地震がそれほど多くない土地だと考えていると思う。地元の避難所の課題を知ることができ、大変よかった。学校の生徒がタイトルコールを担当していて、若い人たちの郷土愛を醸成することにもつながると感じた。ＮＨＫに関心を持ってもらえる効果もあるのではないか。

（ＮＨＫ側）

もしものときに備え、日常的に防災・減災に関する特集を放送し、群馬県に住む人たちの安全・安心につなげたい。タイトルコールは、地域の声を届けるための取り組みだ。今後も視聴者との結びつきを強める取り組みに力を入れていきたい。

○　１月９日(火)のＮＨＫニュース　おはよう日本「埼玉　春日部　特別授業“ひとり

ぼっち”さみしくない」を見た。孤独であっても捉え方しだいで前向きな気持ちでいられると伝える、中学校の授業を取り上げていた。生徒からの手紙を通して、この授業に取り組む養護教諭の思いが伝わってきた。このような授業がさらに広がるとよいと思う。一方で、授業の内容をもう少し具体的に紹介できるとなおよかった。孤独との向き合い方は、中学生だけの問題ではなく、生きていくうえで大切なテーマだ。授業の内容を伝えることで、孤独の苦しみから救われる人もいるのではないか。

（ＮＨＫ側）

「首都圏ネットワーク」で、授業の内容をより詳しく伝える企画を放送した。孤独は大きなテーマであり、思春期の教育においても重要なので、今後も取り上げていきたい。

○　１月１０日(水)のクローズアップ現代「羽田空港　衝突事故　緊急時、命を守る“判断”とは」を見た。１０年間で滑走路への誤進入の事例が２３件もあり、その９割以上は人による目視などで事故を回避していたと知り、驚いた。各メディアで犯人探しのような報道が多く見られる中、ＮＨＫは責任追及ではなく、原因究明の姿勢で伝えていた。今後もそのような姿勢で取り組んでほしい。

（ＮＨＫ側）

事実の確認を最優先に取材した。まず何が起きたのかをシンプルに追求するという姿勢で、これからも取り組んでいきたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局

２０２３年１２月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、５月１５日（月）に放送した「ニュースウオッチ９」報道へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議では、まず、千葉放送局の取り組みと今後について報告があった。その後、首都圏いちオシ！「魅力発見！ラッカ星人の房総ジャーニー２」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	泉田　佑子（書家）
副委員長	田中　裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
委　員	飯島　禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	石塚　　愛（横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト）
	金丸　博子（ファームサポート千葉合同会社　代表）
	坂内　剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	中村　敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田　千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜首都圏いちオシ！「魅力発見！ラッカ星人の房総ジャーニー２」
（総合　９月２４日（日）放送＜関東地方＞）について＞

○　この番組は 2022 年１２月の審議会で意見交換を行った「魅力発見！ラッカ星人の房総ジャーニー」の第２弾だ。その際には「ラッカ星人の語尾の“～ラッカ”に違和感を覚えた」「キャラクターがまじめすぎると感じた」「2019 年の台風被害からの復興に取り残されている人がいないのかなどについても伝えてほしかった」などの意見が出された。これらの意見をどのように反映したのかについても聞きたい。

（ＮＨＫ側）

ラッカ星人の演出のしかたについては、視聴者からもさまざまな意見が届いた。１人１人の声にしっかりと耳を傾けながら、番組づくりをしていきたい。

○　バラエティー豊かな景色を楽しめ、千葉県の魅力が感じられた。「ローカル電車」「町の診療所」「農業を守るシェフ」という３つの話題も興味深かった。地域再生や活性化のヒントがあり、人間のつながりがあり、歴史あるものを現代のニーズに合わせて宝として発展させていた。老若男女を取り上げ、子どもたちの声を拾ったのもよかった。ラッカ星人とタレントの山里亮太さんの掛け合いはテンポがよく、ラッカ星人が「～ラッカ」と言い過ぎなかったのもよかった。気になった点が３つある。駅で花の手入れをする女性の話の途中で、他の人と声が重なり聞き取りにくかった。千葉の皆さんがお勧めの名所を自筆のフリップで紹介する短いコーナー「私の千葉の宝」のタイトル映像で、黒背景に赤青黄の花をのせた色使いが映えないと思った。また時々、白文字のテロップが見にくい場面があると感じた。ユニバーサルデザインを活用しているのかも気になった。

（ＮＨＫ側）

「私の千葉の宝」のタイトル映像や文字の色について、色鮮やかなものを見せたいときは地味な背景にすると際立つというのがディレクターの一般的な考えだ。ユニバーサルデザインの活用は、今後の参考にしたい。

○　美しい景色や県の花である菜の花を映したオープニングに期待を持った。歴史あるもの新しいもの、さまざまな角度から千葉県の魅力を取り上げており、楽しみながら見た。銚子電鉄の話題では、思い出の詰まった宝を守っていこうという強い思いが伝わった。農業体験を行う男性がなぜアフロヘアーなのかにもふれるとよかった。若手の医師が診療所を地域のコミュニティの場にしていたのもすばらしかった。レストランの話題では、規格外の野菜を農家の言い値で仕入れ、支え合うという発想がすばらしかった。2019 年の台風被害がきっかけとなった ローリングストック（常に新しい非常食を備蓄する方法）も大変参考になった。千葉県誕生 150 周年ということなので、県誕生にまつわる話題もあるとよかった。

○　銚子電鉄の話題で紹介された取り組みは、廃線の危機にある他県の鉄道にとっても活性化のよいヒントになると感じた。地域の診療所にも課題が多くあると思うが、このような積極的な医師がいてくれたらうれしいと思った。レストランではシェフが規

格外の野菜を使い、ローリングストックを紹介していたが、このような率先した取り組みがほかの県にも広がっていくとよいと感じた。

○　人の価値観や人生のストーリーに焦点をあて、それ自体が地域の宝であるということがしっかり伝わった。特に印象深かったのは町の診療所の医師の「積み重ねの先に歴史がある。僕らの代で終わらせない責任や地域に果たす役割は当然やるべき」ということばだった。とてもよいことばを引き出せたと思う。レストランのシェフが台風被害の経験からローリングストックを始めた経緯もすばらしいと感じ、さまざまな農産物の生産者のことも知りたいと思った。前回から質が向上した印象を受けた。エンディングで、映像と音楽で取り上げた人たちを振り返る演出もよかった。

○　楽しく見ることができた。ラッカ星人は、なじみやすいキャラクターで好きだ。ローカル電車は地域とともに守っていくべきものであることがよく分かった。町の診療所やレストランのローリングストックの話も、地域で守り続けること自体が宝なのだと気付かせてもらった。続編を制作し、千葉県の全部が紹介されると楽しみだ。ＢＧＭによい音楽があった。テロップで紹介されるとうれしい。とりあげている地域が千葉県のどこにあるのかを示すと、よりわかりやすいと思った。

○　タイトル通り、視聴後に千葉県を旅した気分になれた。人生観、価値観が変わるような内容の濃い番組だった。特徴的で魅力的な３つの地域の活動は、人と人とのつながりに焦点を当てており、ぬくもりを感じ、興味深かった。しっかりと深く掘り下げられており、展開とテンポがよく、映像やＢＧＭも心地よかった。「私の千葉の宝」で紹介される内容には温かみがあり、話題転換となり、番組にメリハリをつけていた。診療所のテントカフェのシーンでの看護師とラッカ星人、山里亮太さんの掛け合いが、その場で話をしているようで印象的だった、この演出はもっと活用してもよいと思った。ラッカ星人の「～ラッカ」はもっと出てもよかったかもしれない。

○　千葉県誕生 150 年を掲げていたが、農業を守るシェフにはその関連性が見いだせなかったので、歴史に言及してもよかった。３つの地域すべてが海沿いだったが、千葉県には魅力的な山もあるので、バランスが気になった。「私の千葉の宝」の演出で、風景を静止画で見せていたが、映像がフリーズしたのかと感じた。静止画であれば額絵のように見せた方がよいかもしれない。エンディングのＢＵＭＰ　ＯＦ　ＣＨＩＣＫＥＮの曲がよかった。それぞれの地域の話題は興味深かったので、第３弾にも期待する。

○　地域の文化は長い年月を経て人々が作り上げていくものだと思う。地域の宝は風景

ではなく、人々の暮らしを支える仕組み、人々のつながりだということが番組からよく伝わってきた。ただ、県誕生150年というのは多くの県がそうである中、千葉県ならではの特別なものの紹介はなかった。出演者のジェンダーバランスもあまりよくなかったと思う。成功事例のみが紹介されていたが、本当は宝なのになくしてしまったもの、うまくいっていないところを取り上げる視点もあるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

取り上げる地域については、このような番組ではいつも悩みどころで、ラインナップとしての内容のバランスとあわせて判断している。今後、内陸部などを取り上げることも考えたい。ジェンダーバランスについても、今後の検討課題だと考えている。

（ＮＨＫ側）

本当は宝なのに今はなくしてしまっているものがないかというのも大事な視点だ。今後の参考にしたい。

○　ナレーションの山里亮太さんとラッカ星人の写真が登場して番組が始まり、両者のトークが楽しみになる演出だった。ＢＵＭＰ　ＯＦ　ＣＨＩＣＫＥＮの「魔法の料理～君から君へ～」が番組と合っていた。ローカル電車では鉄道を守り、活性化させるためにかかわる多くの人々のエピソード、思いが紹介されていた。鉄道は多くの住民にとってもなくてはならない存在であり、鉄道事業者のみならず、地域の人たちが主人公となり、守っていきたいという気持ち、行動がまさにコンセプトの宝であると感じた。一方で、診療所、農業については個人の紹介のように見え、残念に感じた。取り組みそのものはとてもよいことで伝える価値があると思うが、個人ではなく、地域がどう支え合っているのかを掘り下げて紹介し、地域が主人公になるような見せ方に期待したい。農業に関しては、ローリングストックが地域とどのようなかかわりがあるのかがよく分からなかった。レストラン中心に描かれていたため、宝のくくりは「農業」よりも「食」などの方が適切だったように感じた。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１７日(金)のとちスペ「足尾の光と影を描く～画家　鈴木喜美子～」を見た。冒頭の「今日は煙突が喜んでいる」という鈴木さんのことばから引き込まれた。両親を亡くした失意の時に足尾に降り立ち、その姿に心境を重ねた鈴木さんは、病にも向

き合いながら４５年間絵を描き続けた。昔の絵と最近の絵を見比べると色づかいなどが明らかに変わっており、悟りの境地を開いているようにも感じた。足尾銅山の今昔を写真で紹介するものはこれまでも多く見てきたが、絵を通して振り返る表現方法は斬新に感じた。俳優の尾野真千子さんのナレーションにも引き込まれた。

○　１１月１７日(金)の＃金曜やまなし「藤原、貸してみたｉｎワイナリー」を見た。藤原優紀アナウンサーが試飲販売、ぶどうの収穫、実と軸を分離する除梗、破砕作業、醸造を手伝う様子から、華やかなワイン業界の裏側にある汗と努力がしっかり伝わった。一連の作業を見る機会はあまりないので、勉強にもなった。接客は貸出先からも高い評価だった一方で、力仕事に対する積極性はまだまだだと感じた。藤原アナウンサーへの親しみが湧く一方、「山梨県の皆さんの苦労、努力を知れば新たな魅力が見えるはず」という番組コンセプトは、かえって番組の魅力をわかりづらくしているかもしれないと感じた。藤原アナウンサーに、こういう地域産業を手伝いたいと自ら探すような積極性が出てくると、番組がもっとよくなるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

地元の魅力も伝えつつ、藤原アナウンサーの魅力も伝わるよう心がけた。いただいた意見を反映させながら、よい番組にしていきたい。

○　１１月２７日(月)から１２月１日(金)の「首都圏ネットワーク」の「相鉄線・東急線直通　つながる沿線ウイーク」を見た。沿線の知らなかった場所や取り組みを知り、地域の活性化も期待できると思った。特に、「東急“子鉄”“ママ鉄”“親子鉄”スポットを紹介！鈴川絢子さんとＧＯ！」というウェブ記事内の「ちょっと寄り道　鈴川さんのおすすめスポット」のコーナーは、安全面に配慮した記載がすばらしかった。子育て世代のための鉄道スポットの紹介にとどまらず、ふだんは見られない車両基地や、相鉄と東急が分担して仕事をしている新横浜駅の紹介に驚き、保育園不足という社会問題を取り上げていたこともよかった。番組は、地元高校のダンス部の生パフォーマンスもあり、バラエティー豊かな内容だった。

○　１２月１２日(火)の「ひるまえほっと」を見た。産出額全国２位の千葉県のさつまいもを紹介していた。収穫風景や焼きいもの試食で終わるのかと思いきや、熟度による食味の違いや、芋蜜を活用した新たな加工品の紹介があり、おもしろかった。伊藤優キャスターがとてもおいしそうに試食しており、食べたくなった視聴者も多かったのではないかと思う。購入したさつまいもの糖度を上げる家庭での保存方法などの情報が加わると、なおよかった。

（ＮＨＫ側）

さつまいもの糖度を家庭で上げようとすると腐らせてしまうおそれもあり、伝えることが難しかった。

○　１２月１３日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」内の企画「弁護士の兄が語る　尾崎豊」を見た。尾崎豊さんの兄が、家の壁のくぼみを述懐するシーンがとてもよく、弟について話す姿が心に残った。よく取材された内容だった。「曲を練る」というコメントやテロップがあったが、「曲想を練る」という表現の方が一般的だと感じた。この企画は尾崎豊さんの誕生日でもある１１月２９日(水)に「首都圏ネットワーク」で放送されたもので、さいたま局発のニュースが広く伝えられたことをうれしく思った。

○　１１月１４日(火)の「埼玉県民の日」を伝えるニュースで、都道府県の日を定めているところが少ないという取材報告に驚いた。ＮＨＫの職員は転勤が多いと思うが、だからこそ気がつくこともあると思う。日常の当たり前を、新鮮な新しい目で捉え、伝えるとよいと感じた。

○　「いば６」を見ている。茨城県には民放がないためＮＨＫをよく見るが、ローカルニュースや町の話題などのバランスや気象情報のわかりやすさがとてもよい。ＮＨＫとしての見解もちゃんと織り込みながら、偏りなく伝えており信頼できる。日によってＮＨＫプラスでも見ている。最後に明日の話題を告知するのもよい。キャスターは落ち着いているが、ホッとするような感じもあり流れもよい。途中、全国ニュースが入るが、県の話題をもっと伝えたらよいと思う。１２月６日(水)の日立市役所と東海村役場に自動車が突っ込んだ事件のニュースでは、全国ニュースと差別化した県内向けの見解なども伝えるとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

１都６県では、地域情報をきめ細かく伝えるため、午後６時～６時１０分の「全国ニュース」をそのまま放送せず地域放送にあてており、かわりに、午後６時２０分台に「全国ニュース」の中の重要項目を放送している。

（ＮＨＫ側）

茨城県に関係するニュースを「全国ニュース」として伝える場合、県内向けのコメントを付けるなどの工夫については制作

者とも検討したい。

○　新潟局では、雪害に備えた報道をさまざまな形で行い注意喚起している。昨年、立ち往生が起こった際の報道は迅速だったが、災害が起こる前に伝えなければならないし、そうあってほしい。「関東甲信越地方の災害・防災減災報道」をテーマにしたこととし６月の審議会では、「災害が起きる前のフェーズ、起きようとしているフェーズ、起きているフェーズのそれぞれで必要とされる情報は異なる」という意見もあった。新潟局として災害報道の態勢をどのように整え、人命を守る報道をおこなう考えか問いたい。

（ＮＨＫ側）

今年は雪のシーズンに入る前から、気象台、国土交通省、ＮＥＸＣＯ東日本、東北電力と積極的に意見交換や勉強会を行い連携を強化した。気象台からの事前情報をもとに、被害が予想される地域に事前に取材クルーを派遣することも検討している。最新情報を伝える道路カメラも、新たにケーブルテレビ局１社と協定を結んだほか、国や県の設置カメラも利用できるようにし、利用可能台数は昨年の７０台から 220 台に大きく増やした。地域の放送局として、住民の安心・安全を第一に、防災・減災につながる放送に努める。

○　１２月１３日(水)のクローズアップ現代「ゆがんだ“正義”はなぜ　～私人逮捕系動画の波紋～」を興味深く見た。ほかの番組にはない切り口で、価値ある内容だった。本人は自分の正義観から動画を配信しているのだろうが、迷惑系、暴露系、私人逮捕系など、課題があるものが出てきている。それに対してどう向き合ったらよいのかを、ネットメディアの研究者や感情心理学の専門家が解説していたのがよかった。「私たちは白黒つけられないグレーな世界で生きている。想像力を働かせていくことだ」という話があったが、白黒つけずにいたからこそ旧ジャニーズの性加害問題があったともいえ、人間のあいまいさも感じた。このような番組を今後も制作してほしい。

○　高校講座「書道Ⅰ」を毎回見ている。特に「写経を極める　～般若心経～」の回での筆の持ち方、水滴の使い方、書式などの技術指導は目を覆いたくなるような内容だった。この番組は 2015 年に制作されたものだが、同じ番組を何年放送するのかにも疑問がある。書道を学ぶ希少な番組だと思うので、技術面の伝え方に対する意識も高めていただきたい。１２月１２日(火)の今年の漢字「税」のニュースは、貫主が漢字を書き上げる場面で、大事な手元が頭に隠れて見えなかったことが残念だった。

○　衛星放送の再編について、分かりやすく説明していると思うが、視聴者からの反応はどうか。

（ＮＨＫ側）

一時は問い合わせがかなりの数あったが、ご理解をいただき、順調に減少している。さまざまな意見があるが、今後も臨機応変に対応していく。

○　各チャンネルで頻繁に詳しく丁寧に案内がされていたと感じた。

（ＮＨＫ側）

高齢者からは４Ｋ放送の視聴方法の問い合わせも多い。ＢＳプレミアム４Ｋの視聴方法や番組についても丁寧に周知していく。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局

２０２３年１１月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１７日(金)、ＮＨＫ新潟放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、令和５年地上基幹放送局の再免許にあたっての総務大臣の要請の紹介があり、議事に入った。

会議では、まず、新潟放送局の取り組みと今後について報告があった。その後、Ｄｅａｒにっぽん「“棚田じじい”と“祭りばか”～佐渡島　実りのふるさと～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	泉田　佑子（書家）
副委員長	田中　裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
委　員	飯島　禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	石塚　　愛（横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト）
	金丸　博子（ファームサポート千葉合同会社　代表）
	坂内　剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	鈴木　美穂（認定ＮＰＯ法人マギーズ東京　共同代表理事）
	轟　　直希（長野工業高等専門学校　工学科都市デザイン系准教授）
	中村　敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田　千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜Ｄｅａｒにっぽん「“棚田じじい”と“祭りばか”～佐渡島　実りのふるさと～」
（総合　１１月５日（日）放送）について＞

○　冒頭の美しい棚田の景色に心を奪われた。棚田に観光客を呼び込みたい“棚田じじい”こと大石惣一郎さんと、その考えに納得できない“祭りばか”こと平間順二さんが登場し、どんな展開になるのかと興味を持った。テロップが効果的で、「大石さんと平間さんは会話を交わすことはほとんどない」という情報は緊張感を生み、「集落

に浸透していない棚田の保全活動」という情報は大石さんのやるせなさを感じさせた。対立しているように見える２人だが、丁寧な取材から、コアな部分は同じで、それぞれが将来に思いを巡らせながら、守りたいものを守るという強い信念が伝わってきた。終盤の子どもが踊るシーンには未来への希望を感じた。シンガーソングライターのｍｉｌｅｔさんのナレーションはとても聞きやすく、よかった。

○　直接対話するわけではない２人がまるで直接関わっているかのように感じさせる構成に、不思議な感覚を持ちながら見た。強烈なインパクトのあるタイトルだったが番組を見て納得した。平間さんが番組のキーマンだと感じ、思いの詰まった飾り気のないひと言ひと言が印象的だった。太陽に照らされ輝く棚田のドローン映像がすばらしく、実際に見てみたいと思った。棚田へ続く道程を早送りで見せていたが、速すぎて少し酔いそうに感じた。大石さんが地元企業と協力している取り組みは他の地域にとっても参考になると思った。棚田がなくなってもかまわないと話していた平間さんが米の収穫時に「棚田がなくなったら寂しい」と発言した印象的な場面あったが、カメラが稲のほうに寄っていたので、平間さんの表情が撮れていたらさらに印象的だったと思う。

○ 冒頭のドローンの空撮に引き込まれた。棚田存続のために活動する大石さんに対し、平間さんは五穀豊じょうの祭りを大切にする一方で、棚田が存続できなくてもよいという考えに矛盾を感じた。平間さんが収穫した米を大石さんが販売していたが、口をきかない関係で米を一緒に売ることはあまり考えにくく、演出によって２人の対立が際立って見えたのかもしれないと気になった。２人がたばこを吸うシーンが多かったことも気になった。平間さんが最後に「棚田がなくなったら寂しい」と語っていたが、できれば２人が協力し、集落以外の人の力も活用し、棚田も祭りも守ってほしいと思った。大石さんは地元企業とも連携していたが、そのきっかけについても説明があるとよかった。

（ＮＨＫ側）

ドローン撮影では、棚田の魅力を余すことなく伝えるように努力した。２人が対立しているように見えるが、根は同じという構成を心がけた。早送りの映像については今後注意を払いたい。平間さんはディレクターが多くの方を取材した中で出会うことができた。たばこを吸うシーンが多くなったが、２人の本音がよく出ているシーンだったので生かした。

○　棚田が美しく、映像がとても考えられている印象を受けた。２人の対立は、どちら

寄りということもなく、客観的に伝えていたと思う。狭い道での観光客の車の運転が危ないという話があったが、よいことだけでなく、問題点も伝えていたのはよかった。町おこしでは「よそ者、若者、ばか者」の三者が必要と言われている。極めて熱心に取り組むという意味での「ばか者」に大石さんと平間さんが当たると思う。大石さんは「よそ」からボランティアや大学生や若い人を受け入れる。平間さんは息子など「若者」の後継者を育てている。方向性は違うが、ふるさとの宝を残したいという強い思いは同じで、通じるものがあると感じた。テーマ音楽の「魔法みたいに」は、心に染みてよかった。

○　冒頭で棚田が光り輝く様子はとても美しく、高揚感を感じた。ナレーションは落ち着きがあり、聞きやすかった。初めに地域が抱える問題が説明されたが、「大石さんと平間さんは会話を交わすことがほとんどない」という表現は地域を分断しているように感じた。棚田と祭り、ふるさとの大切な文化を本気で守っていく思いは共通しており、その思いを深く掘り下げれば両者の交わる点が表現できたのではないかと思った。平間さんの「棚田がなくなったら寂しい」ということばは米作りをする仲間との居場所がなくなることが寂しいという意味で、大石さんが守ろうとしている棚田の景観への思いとはずれがあるのではないかと感じた。

○　棚田での米作りを守ることと棚田の景観を守ること、どちらの意味合いなのかがあいまいだと感じたのは同意見だ。祭りと米作りが同時に存在していることは日本中当たり前の話で、田があるから祭りがあり、祭りがあるから田があることがしっかり表現しきれていなかったのではないかと思った。対立関係に関しては、なぜ２人をまとめようとしたのかが気になった。平行線ならば平行線のままでよく、視聴者の受け止めにまかせればよいと思った。

○　全体的な感想としては、よくできており、地方ではよくある話だとも感じた。相いれない２人という紹介で番組が始まったが、棚田がなくなれば互いにこの地にはいられなくなるので、意見の違いを心配することはないと思った。番組放送後の２人の感情の変化が気になった。互いの価値観を理解し、前に進んでいくことができるとよいと感じた。番組の構成や演出はすばらしいと思ったが、テロップの文字の大小が気になった。２人も根本の部分ではつながっているのだという印象を高めるような伝え方もあったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

視聴者にいかに感情を持って見ていただくかを考える中で、対立構造をとりつつも最終的には通じるものがあるという

ことを表現したかった。２人が交わらないことをどう伝えるのかについてはスタッフの間でも最後まで議論した。

祭り、棚田、米作りは農村において一体のものだが、もっと説明したほうがよかったかもしれないと思った。

平間さんの「棚田がなくなったら寂しい」という発言の解釈は視聴者に委ねるという選択をした。

○　カメラワークがとても美しいドキュメンタリー番組だった。佐渡島の自然、棚田の美しさが圧巻で、ぜひ行ってみたいと思う映像だった。登場する人たちが自然体で撮影されており、人柄もよく描かれていた。一方で、テロップで補助している部分が多く、文字を追わねばならず、理解しづらい部分もあった。たばこを吸うシーンはあまりにも多かった。自然体なのだろうが、内容よりもたばこが気になってしまいもったいないと思った。私には、大石さんも平間さんも、棚田がなくなるのは寂しい、守りたいという同じ方向に向かっていったように思えた。

○　棚田は美しい景観なのでそこに目が行きがちだが、地理的な条件もあって、集落から離れた場所に小さな田を作ってきた歴史があるはずで、美しいというだけで終わってはいけないと思う。そのような視点からも棚田の暮らしを説明するとよかった。なりわいの場であることが伝われば、観光客のマナー向上にも役立つのではないかと思う。実情は知らないが、私は２人に共通点を感じた。この番組は、視聴者もそうだが、当事者、地域の人たちがどう受け止めたのかという点が大切だと思った。番組により、２人が会話をしたくなったらよいと思った。

（ＮＨＫ側）

佐渡島の棚田は急しゅんで、先人が苦労した歴史もある。限られた時間の中でどのあたりを説明するかはいつも悩むところだが、いただいた指摘は今後の参考にしたい。

○　観光は価値が上がりすぎると見世物になってしまう可能性がある。暮らしが最優先で、生存ができなければ観光も守れない。問題は後継者不足だ。人口流出問題は集落で解決するには重すぎる。佐渡島の実態を日本の人々に伝え、問題意識を共有することのできる番組だった。

○　大石さんと平間さんの対比が分かりやすく、興味深く見た。学生やインバウンドを呼び込もうとした取り組みには共感したが、取り組みを広げることの難しさも含めて、まちづくりに関心のある視聴者にとっては参考になる内容だったと思う。祭りを大事

にしたい平間さんと後継者がいないと悩む大石さんを結びつける人がいればよくなるのにと思った。

＜放送番組一般について＞

○　「首都圏ネットワーク」で１０月から始まったシリーズ「第二報」を見た。事件や災害は大きな続報がない限りは第一報で終わることが多い。その後の気付きや再発防止策が報じられることが少ないため、時間をおいてあらためて取材し、報道するというこの企画は貴重だと感じた。取材者の人材育成の視点でも優れていると思う。１１月１日(水)の「立体駐車場火災で起きていた想定外の火事」は、フラッシュオーバーが起きた可能性があるという他メディアでは報じられていないニュース性も引き出していた。１１月８日(水)の「ドラレコがとらえた車水没の罠」では、事故当時の映像からタクシー運転手を探し出して取材・分析できていたのがすばらしく、誰にとっても参考になる企画だったと思う。今後も注目している。価値ある「第二報」を報じてほしい。

（ＮＨＫ側）

「立体駐車場火災で起きていた想定外の火事」は、入局２年目の若手記者が粘り強く取材を積み重ね、貴重な映像と独自性の高い情報を入手して伝えた。発生時だけで取材を終わらせず、しっかりと取材活動を継続することは、記者本人にとってもよい経験になると思う。

○　１１月８日(水)～１０日（金）の「ほっとぐんま６３０」の「ぐんまキャラバン」を見た。３日間にわたり、群馬県の南牧村、沼田市、桐生市から生中継していた。午後６時台に地元の生中継を見ることは民放も含めてあまりなく、インパクトがあり、驚きを感じながら見た。このような番組を見ることで、故郷のことを思い考える気持ちが強まるのではないかと感じ、このような放送はもっと増やしていくと良いと思った。

（ＮＨＫ側）

「ぐんまキャラバン」は、４年ぶりの開催だった。地域再生、町おこしの応援をテーマに取り組んだ。好反響も多く、若手職員にとっての大きな経験にもなった。

○　１１月１０日(金)の首都圏情報ネタドリ！「突然　介護も担ったら･･･ビジネスケアラーの悩みに答えます」と１１月１３日(月)のクローズアップ現代「仕事と介護に挟まれて　ビジネスケアラー３１８万人時代の現実」を見た。首都圏情報ネタドリ！ではビジネスケアラーの当事者の悩みに専門家が回答し、遠距離の電話介護など、仕事と介護の両立の要点を伝えていた。クローズアップ現代では、４０代、５０代が仕事と介護を両立する場合の制度の限界や企業側にとって必要な備えを伝えていた。介護の悩みを抱える同年代の様子を見て、自分に置き換えて考えることができた。一方で､介護されている側の意見も知りたかった｡首都圏情報ネタドリ！では､専門家が、介護を頑張りすぎるよりも少し離れているほうが結果としてよい介護環境になることが多いとして「“親不孝”介護」ということばを使ってアドバイスしていた。このアドバイスの意図は理解できるが、本当にそれでよいのかとも思った。

○　１０月２１日(土)のＮＨＫスペシャル「超・人手不足時代～危機を乗り越えるには～」を見た。エッセンシャルワーカーを確保することの重要性や、さまざまな新しい取り組みが紹介され、とても参考になった。１１月５日(日)の日曜討論「超・人手不足時代　危機を乗り越えるには」では経済再生担当大臣や専門家などがさらに深く議論していた。２つの番組を通じ、人手不足への対応の必要性を感じた。

○　少子高齢化時代の重要なテーマを複数の番組で放送するのはとても新鮮で、多角的に物事を捉え、考えることができた。一方で見逃す方も多いと思うので、ＮＨＫプラスやＮＨＫオンデマンドで、関連する番組をあわせて視聴することを促してもよかったと思う。

○　首都圏情報ネタドリ！「突然　介護も担ったら･･･ビジネスケアラーの悩みに答えます」を見た。介護の実態を伝えることはとても大事だ。民間企業では介護休暇の取得が難しいということもあるかもしれないので、広く一般に伝えたのは意味のあることだと感じた。

（ＮＨＫ側）

首都圏情報ネタドリ！とクローズアップ現代は同じスタッフが制作した。介護については、引き続き取材し伝えていきたい。ＮＨＫプラスなどで関連する番組を見やすくすることは今後の課題だと考えている。

○　１１月１０日(金)の知るしん　信州を知るテレビ｢もぐしん定期便･秋編｣を見た。今回は伝承をテーマに、｢お茶うけ」と言われるおやつや、戸隠そばに欠かすことの

できない竹細工のざるなど、いろいろな面から信州の食の魅力を知ることができた。もぐたんの声には愛嬌があり親近感が持てたが、バーチャル空間の演出は生かし切れていないと感じた。竹細工の紹介では、ほかにはない工夫や秘密をもっと詳しく伝えてほしかった。先日、長野県が指定する県内の伝統的工芸品２１品目のうち３品目の産業実態がほぼなくなっているという報道があったが、技術の唯一性、ここでしか作れない、ここのものしかその機能がないということを人々に再認識してもらい、使って守る機運を高めることもＮＨＫの地域放送局の大きな役割だと感じる。今回のような食をテーマにした番組でそのようなことも伝えることができれば有効だと思うので、今後に期待したい。

（ＮＨＫ側）

バーチャル空間の活用は今後の課題としたい。戸隠の竹細工については、作り方を秘匿するために紙に記録せず、人づてで伝えており、テレビでどこまで表現できるかという面もあった。

○　１１月１０日(金)の金よう夜きらっと新潟「“紙おむつごみ”考えてみませんか？」を見た。全国的に焼却処分場の縮小や閉鎖が進み、最終処分場も増やせないという行政の課題を伝えていたが、重要なことはごみを減らすことと分別だと思う。番組で紙おむつがリサイクルできることを知ったが、全国で３５の自治体が実施、あるいは取り組みを検討していて、中でも先進的だったのは福岡県の自治体と紙おむつメーカー共同の取り組みだった。福岡県での取材は新潟局が実施したものか、福岡局と連携したものか、知りたいと思った。ごみ問題に関心を持たない人もいると思う。最終処分場が増やせない、焼却場が縮小しているという問題についても、今後も取材し伝えていくとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

金よう夜きらっと新潟「“紙おむつごみ”考えてみませんか？」について、福岡県の事例は新潟局のディレクターが福岡局などに知らせたうえで、独自に取材した。このようなテーマを幅広い人に見ていただくための演出については今後も工夫したい。

○　１１月１０日(金)の茨城スペシャル　うまいッ！「コリコリ食感　美しいきのこはなびらたけ」を見た。高地に生える幻のきのこなどのさまざまな話があり、感心しながら見た。挿入されたアニメも素朴で楽しく、ＢＧＭで流れた「世界に一つだけの花」の歌もよかった。試食がおいしそうで引き込まれた。保里小百合アナウンサーの

リポートも分かりやすかった。ＮＨＫプラスで配信されていなかったが「茨城スペシャル」でも配信されるものとされないものの違いが気になった。

○　１０月１３日(金)の茨城スペシャル「ゆるチャリさんぽ　春夏編」と、１１月１５日(水)の「いば6」の「ゆるチャリさんぽ」を楽しく見た。シリーズすべてで番組を構成すると、茨城県の美しい歳時記になると思った。

（ＮＨＫ側）

茨城スペシャル「ゆるチャリさんぽ」は、ふだんは技術を担当している職員が提案し、取材、制作した番組だ。「春夏編」に続き「秋冬編」も放送する予定だ。ＮＨＫプラスでは新作を中心に配信している。

○　１０月２９日(日)の１ミリ革命「我が家の隣に野生動物！　あなたはどうする？」を見た。千葉県で急激に繁殖して獣害となっているキョンを取り上げていた。環境問題の専門家、環境系エンターテイナー、行政の３つの視点で解決策を考える内容がとても興味深く、参考になった。アライグマの対策事例も紹介されたが、獣害に悩む自治体にとって有益な情報だったと思う。害獣は住宅地にも出没するようになった。１０月２５日(水)には、政令指定都市の中心部である千葉市中央区にイノシシが出没し３人のけが人が出たというニュースがあった。自分たちの町を獣害から守るにはどうするべきかを考える番組を制作するとよいと思った。

（ＮＨＫ側）　千葉県はキョン、イノシシ、アライグマ、ハクビシンなどさまざまな野生動物が住宅街に出没して問題となっており、関心も高い。今後もしっかりと伝えていきたい。

○　１１月１２日(日)のダーウィンが来た！「生きものの不思議を解き明かせ！子ども研究者スペシャル」を見た。子ども研究者スペシャルを初めて見たが、セミの幼虫を研究する小学生とサワガニの自然繁殖を研究する小学生が出演し、その探究心に感心した。大人や専門家の協力を得ながら成功と失敗を重ね、疑問の答えを突き詰めていた。サワガニ研究では子どもの意見や感想が聞けたが、セミ研究ではデータを集める様子や解説が中心で、子どもの声を聞くことがほとんどなく残念に感じた。子どもが主役になる番組構成にしてほしいと思った。このことはＮＨＫの他の番組にも言えることで、子どもにフォーカスを当てる番組であれば、子どものインタビューをもっと多く取り入れてもらいたい。

○　「クラシックＴＶ」の公開収録を観覧した。ふだんクラシック音楽はあまり聴かないが、司会の清塚信也さんに魅力を感じて観覧した。清塚さんの軽快なトークで曲の裏話を聞きながら楽しんだ。東京フィルハーモニー交響楽団の演奏がすばらしく、聞き覚えのある曲も多く、初心者でも楽しめた。

○　１０月から、総合テレビの日曜日午後８時４５分の「ニュース・気象情報」に手話通訳が付くようになった。十分な大きさで顔の動きもよく分かり見やすい。ほかにも人気番組に手話をつけて放送する「手話で楽しむみんなのテレビ」など手話番組が増えている。ろう者と聴者が同じ番組を見られることはとても貴重だ。ＮＨＫはだれもが等しく情報を受け取ることができる放送サービスを目指していると思う。そのような観点からも手話通訳の対応を進め、その取り組みを広く知らせてほしい。手話を勉強する人にとっても役に立つ。

○　さいたま局が実施したイベント「＃テレビのカケラでなにつくる？」はタイトルが秀逸だった。テレビのカケラとはセットや小道具の廃材のことだったが、ことば選びのセンスがよかった。番組の制作過程で出る廃材を再利用することは大切なことだと思う。さいたま局では、カケラに新たな命を吹き込んだ作品を展示しているが、多くの人に足を運んでもらい、ＮＨＫを身近に感じてほしいと思う。

○　「首都圏ネットワーク」で１１月６日(月)～１０（金）に放送された「埼玉発！芸術が街を変える」を見た。毎日切り口を変えて構成が多彩で、とても楽しめた。埼玉からの情報発信に、埼玉に暮らす人々は喜んだと思う。

（ＮＨＫ側）

ニュースの手話は、さまざまな課題に対応しながら実施している。事例を重ねることで、将来的には、さらに多く提供できるよう検討したい。

（ＮＨＫ側）

「埼玉発！芸術が街を変える」の中でも、ろう学校の方に出演していただいた。このような取り組みは続けていきたい。

○　今年ほどクマ、サルの被害が多い年はないと地域で話題になっている。クマの被害はニュースでも取り上げられているが、例年にない頻度で、命にかかわる危険もある。新潟県は半分が山と隣接していることもあり、住民はとても心配している。番組でしっかりと検証し、地域に密着した内容で伝える必要があると思うが、迅速に対応し

ないのはどういう理由なのか。これから起こる雪の被害などの注意喚起情報もあるだろうが、今伝えるべきは何か、緊急性を考慮して伝えてほしい。解決が急がれる北朝鮮の拉致問題の報道はしっかりと伝えているが、力を抜かずに継続してほしい。

（ＮＨＫ側）

ニュース番組ではクマの出没現場を報じ、「ＮＨＫニュースおはよう日本」の特集では市街地に出没するクマの実態や対策法について新潟大学の研究者の監修も得て放送したが、緊急的に番組を立ち上げるには至っていなかった。引き続き、新潟県内がクマ被害の多発地域であるという認識をしっかりと持って放送にあたりたい。

拉致問題については、横田めぐみさんが拉致されてから４６年のタイミングに「ＮＨＫニュース　おはよう日本」や「新潟ニュース６１０」の特集、そのほかニュース番組の中で厚く放送した。今後も力を入れていく。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局

２０２３年１０月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２０日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、甲府放送局の取り組みと今後について報告があった。その後、＃金曜やまなし「藤原、貸してみたｉｎ山小屋」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	泉田　佑子（書家）
副委員長	田中　裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
委　員	飯島　禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	石塚　　愛（横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト）
	金丸　博子（ファームサポート千葉合同会社　代表）
	坂内　剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	轟　　直希（長野工業高等専門学校　工学科都市デザイン系准教授）
	中村　敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田　千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜＃金曜やまなし「藤原、貸してみたｉｎ山小屋」
（総合　７月７日（金）放送＜山梨県域＞）について＞

○　オープニングのアニメーションに好感が持てた。子どもの声によるタイトルコールも幅広い世代に親しまれることを意識したものだと思った。藤原優紀アナウンサーが２泊３日で仕事を体験する番組の形は新鮮で、山小屋の裏側だけでなく、主人である三井孝司さんの人柄やそこに集う人々の様子もリアルに伝わった。藤原アナウンサーについては、アナウンサーになって何年目か、何が好きかなどの情報も伝えるとよかった。藤原アナウンサーの取り組みの姿勢には甘さを感じる部分もあり、客に提供する献立を考える際の言動などには良い印象を持てなかった。番組で紹介されなかっ

たエピソードを伝えるウェブサイトの動画があったが、三井さんの人柄やプロフェッショナルな面がよくわかったので、番組で紹介してもよかったと思った。

○　藤原アナウンサーと三井さんの人となりがよく分かった。ＮＨＫのアナウンサーのイメージとギャップのある藤原アナウンサーのキャラクターが見たいと思う気持ちを高めた。テロップや音楽には視聴者を楽しませようとするこだわりが感じられた。「一歩先を考えて行動する」という三井さんの助言は、日常生活にも通じると感じた。山小屋の仕事については詳しく知らなかったが、客のキャンセルなど天候に左右される大変さが分かり、関心を持った。

○　冒頭からの流れが見やすく、番組の意図もよく分かった。ナレーションが要所を押さえており、ＢＧＭも凝っていて楽しかった。以前の山小屋は、食事が質素で雑魚寝するところだというイメージを持っていたが、今の山小屋は大きく変わっていると思った。藤原アナウンサーは掃除が得意と言いながら畳の目に逆らって掃除機をかけるなど、失敗も隠さずに見せていたが、成長するのを見るのは楽しく、共感が得られると感じた。やさしく指導する三井さんの人柄もよく表現されていた。「ブラタモリ」に出演するアナウンサーのように、地域放送局で親しまれた後に活躍するのも楽しみだ。別のアナウンサーに変わっても長く続く番組になりそうな気がした。

○　山梨県の特徴の一つが山だが、藤原アナウンサーの仕事ぶりを通じ、山小屋の仕事のやりがいや難しさをうまく表現していた。ＮＨＫのアナウンサーには堅いイメージがあるが、藤原アナウンサーの自然体には親しみやすさを感じた。三橋大樹アナウンサーの軽快なナレーションはさすがで、質・量・バランスがよかった。藤原アナウンサーが日記を読むのは効果的で、日を追うごとに成長する様子が伝わった。エンディングには「貸した藤原、見てみた」というウェブサイト限定の動画の紹介があり、視聴者と一緒に番組を作っていく仕掛けとしてよかった。藤原アナウンサーを借りたいという募集の告知にもＱＲコードを表示したらよかった。今後は放送回数を多くしたほうがよい。いつ放送されるのかも分かりづらいので、月１回ほどの頻度で放送されるとより親しまれると思う。

○ 藤原アナウンサーの飾らないキャラクターや、緩急のある聞きやすいナレーション、「もう少し頑張りましょう」のようなテロップが印象的だった。冒頭で「山梨の皆さんの苦労や努力を知れば、新たな魅力が見えるはず」と伝えていたが、藤原アナウンサーが最後に「大変さ、苦労が分かりました」とまとめただけで、新たな魅力が何だったかは分からなかった。藤原アナウンサーからは体験する仕事へのポジティブな発言がもっと欲しかった。場当たり的なやりとりが多く、親しみやすい一方で、子どもの職

業体験を見ているような印象を受けた。事前に体験する仕事をしっかり取材し、そこから分かったことを体験しながら掘り下げ、ふだんは想像がつかない舞台裏や商売人や職人のすごみ、山梨県ならではの魅力がもっと伝わる番組になるとよいと思った。

○　藤原アナウンサーは苦手なことがありつつも終盤には慣れてきて、客とのコミュニケーションも取れ、笑顔もあり、さすがはプロのアナウンサーという面が見られてよかった。ナレーションが見る側の心の声を代弁し、上手にフォローしていたので飽きずに見られた。料理の付け合わせを任せられた藤原アナウンサーが、慣れないキッチンで時間も迫る中、ミスがありつつもあきらめずに完成させたところが印象に残った。三井さんの人柄がよく、藤原アナウンサーの短所もきちんと指摘して、成長を促していたことに好感を持った。

○　山並みから山小屋の映像が切り替わる導入はスムーズで、すんなりと見始めた。「藤原、貸してみた」という表現には賛否があるかもしれないが語呂はよい。イラストもかわいらしくＢＧＭもよかった。ナレーションも適切で、丁寧に編集されている印象を受けた。藤原アナウンサーは心細いのか、ディレクターを見ながら話しかける場面が多かったが、もう少しカメラ目線でもよかった。頼りなさそうな感じが貸し出しキャラに適任なのか、山梨県の人たちから愛されているのだろうと思った。失敗を重ねる姿をほほ笑ましく見たが、成長を見守る感じが強かった。「新たな魅力が見えてくるはず」という番組コンセプトはよかったが、結論はよくわからなかった。登山者に対する視点を持つなどして山小屋の取材を深めれば、山小屋が山梨県の魅力を支えていることに帰結できたのではないかと思った。今後藤原アナウンサーの貸し出し希望が増えると思うが、得られる貴重な体験を山梨県の魅力を伝えるための糧にしていくとよいと思った。

○　山梨県の人たちと共に作り上げていこうという参加型の企画に共感できた。アナウンサーが職業体験することで関心を集め、若い世代や子どもの学びにつながる可能性も高く、ウェブでの展開もよいと思ったが、子どもへのインタビューがなかったのは少し残念だった。三井さんも指摘していたが、藤原アナウンサーの自主性が最大の課題だと思った。借りる側にお客様扱いされる関係では本当の体験にはつながらない。事前準備も必要だと思う。掃除や料理に苦労する様子を長く見せるよりも、ウェブサイトで紹介していた動画を見せたほうが学びにつながったのではないかと思った。番組に対する固定観念を外して考えてみることも大切かもしれないと感じた。

○　藤原アナウンサーが実体験する様子を通して、山小屋経営の大変さが実感できた。放送後にウェブ限定の「貸した藤原、見てみた」を見たが、藤原アナウンサー自身の

振り返りや反省があるのはとてもよかった。冒頭に高校生のころ握力が７キログラムだったという話題があったが、その話の落としどころが欲しかった。今後貸し出し希望を募集するということだが、実際どれぐらい応募が来ているのか知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

藤原アナウンサーに対し事前に体験する仕事の情報を与えるかどうかについては、白紙の状態で飛び込ませるおもしろさもあるし、きちんと事前準備をして現場の魅力を引き出すやり方もある。固定せず現場次第で変えることもあり得ると思うので、今後の参考にしたい。藤原アナウンサーのキャラクターの生かし方については、失敗するが温かく見守るというさじ加減が難しかった。貸し出しに関しては４、５件の問い合わせがあり、その中から申し込みがあった老舗ワイナリーで第２弾を制作する。藤原アナウンサーの頑張りを見せるのはもちろんだが、ワイン造りの奥深さも丁寧に伝えたい。

＜放送番組一般について＞

○　９月２６日(火)の「ひるまえほっと」の「“知られざる余震”中学生が日記で読み解く」を見た。関東大震災の余震である“丹沢地震”発生当時の日記を、中学生が読み解いたという事実に驚いた。日記を書いた人の年齢や現在の所蔵先、中学生がこの日記にたどり着くまでの経緯などの情報もあるとよかった。中学生がこのような調査をしていることは頼もしく、放送が研究の励みになると思った。地震への備えを考えるうえで、本震だけではなく余震についても想定しておく必要性を考えさせられた番組だった。

○　９月２９日(金)の首都圏情報ネタドリ！「急増！“駅前・高層”再開発　家選び・暮らしはどう変わる？」を見た。模型による再開発の説明が分かりやすく、取り壊しを喜ばない側の意見に偏ることなくバランスが取れていた。さいたま市で学校の用地を確保するために、市民に親しまれた“沼影市民プール”が閉鎖されるという話題は「埼玉ＷＥＢ特集」にも掲載されていたが、「“沼プー”も消える？」という見出しが興味を引いた。丁寧な取材により小児科の受診予約が取れない問題などが示され、人口増加を手放しで喜べない現状が分かった。さいたま局は大規模マンションの防災対策、災害時の帰宅困難などの課題に取り組んでいるが、取材を進めることで解決策を導けるのではないかと思う。今後の取材に期待する。

○　９月２９日(金)のキタカン＋「撮れた亭『キタカン』」を見た。お笑い芸人のタイムマシーン３号が居酒屋で撮れたての映像を見るという設定が見やすかった。近くの町には水産加工業に従事する外国人が多いと知り、身近に感じ仲よくしたいと思った。中古車売買に従事するパキスタン人が多い地域や、１０人に１人がブラジル人の町など、次々と新しい知識や興味深いエピソードが紹介され、飽きることなく見た。「偏見を持って欲しくない」という外国人のことばがあったが、地域住民とあつれきなどの問題もあると思うので、そのような課題に踏み込まずに終わったことは少し気になった。身近な外国人のことを詳しく知ることができてとても参考になり楽しい番組だった。このような番組は続けてほしい。

○　１０月６日(金)の金よう夜きらっと新潟「どう守る？　新潟のコメ～１等米　過去最低水準に～」を見た。今年の夏の記録的な猛暑と水不足で新潟県の米が大きな被害を受けたことと、その対策について紹介していた。冒頭、「米どころ新潟がかつて無いほど危機にひんしている」というコメントに引きつけられた。紹介されるデータにはインパクトがあり、分かりやすかった。「これは田んぼの土ではない。砂漠だ。」ということばや、等級検査で落胆する様子、語られる不安から、農家の苦悩が強く伝わった。複数の品種を栽培してリスク分散するなどの対策の事例も紹介するとよいと思った。

○　１０月６日(金)の「金よう夜きらっと新潟」は、メッセージ性の高い番組だった。新潟局は米づくりをめぐる課題に数年にわたり取り組んでいたが、今年の記録的な猛暑に危機感を持って取材をして解説し、今後の問題や可能性も含めて発信した。新潟県の米づくりの現状に警鐘を鳴らす大変意義のある番組だった。新潟県の研究機関の試験の結果として、１等米から３等米で食味に差がないと紹介していたが、そのことにあまり納得ができなかった。そのような問題になぜなっているのか、県の方針や施策などを取材して、全国に向けても米の等級への正しい理解を伝えてほしいと思った。今回はコシヒカリを取り上げていたが他の品種を栽培した農家はどうだったのか、また、他の品種に移行する際のリスクや課題についても取材を重ねてほしい。

○　農作物に対して、リスク分散のために猛暑に強い品種に替えたらよいという意見があるが、農家にとって品種を替えることは簡単ではないと感じている。品種を替えて収穫・出荷した後に、食味が違うことを理由に販売を断られて損害を出したという話もある。猛暑の中の農作業は非常に厳しいので、温暖化が進むようだと日本の農業は終わるのではないかという危機感を抱いている。そのような観点も番組で取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

前回の番組審議会で頂いた「猛暑によってさまざまな業種に被害が出ている。問題提起も含めた深い取材で地域の人たちに寄り添う報道を」という意見もふまえながら番組を立ち上げた。新潟県ではコシヒカリのブランド力が強く、農家も簡単に手放せない実情もあるが、地球温暖化が懸念される中で、今のままの米づくりでよいのかが今後の取材のポイントの一つになると思う。米をめぐる動き、課題については今後も新潟局の重要なテーマとして多角的に取材をし、情報の発信に努めたい。

○　１０月１０日(火)の「ひるまえほっと」で横浜局の「町の存続を見据え　“事前復興”」の取り組みを見た。“事前復興”とは、災害が起こる前後でどのように町を復興させたいのかを事前に話し合っておくということだった。それにより将来に備えるだけでなく、現在地域が抱える問題をあぶり出して検討することもできる。資料を基に関東大震災のときに横浜市内で数時間のうちに火災が広がる様子を可視化した映像は分かりやすかった。このような映像がいろいろなところで見られると住民の理解が深まると思った。横浜市立大学の准教授が学生らしき人と話をしているシーンがあったが、若い世代の意見も聞きたかったので、学生が言っていたことを知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

学生と准教授とのやりとりの内容は９月２７日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で詳しく伝えた。学生からは「地域内のつながりをいかにして創出するか」「いろいろな人が関われる場所を空き家を利用してつくればいい」といった意見があった。

○　１０月１２日(木)の「イブニング信州」を見た。2019年の台風１９号の被災地域の防災組織力を高める取り組みと、千曲川河川事務所から避難情報発令の仕組みが紹介された。自助、共助の重要性を再認識できる内容だった。氾濫注意など水害のレベルを紹介する際、気象庁のホームページ「キキクル」を確認しましょうというコメントがあった一方で、河川事務所からの中継ではＮＨＫニュース・防災アプリを紹介していたが、片方ではこれを、もう片方ではこれをと言うと視聴者は混乱する。それぞれの利用に適した状況の補足説明があるとよかった。

（ＮＨＫ側）

災害に備えて見るべきデータを紹介するときには、丁寧さをさらに意識し、県民が最適なツールを普段から使うことができるように伝えていきたい。

○　１０月１３日(金)の首都圏情報ネタドリ！「おにぎり“戦国時代”が到来！？　国民食の変化が映す日本」を見た。ビジネスとしての分析や時代背景の説明がしっかりあり、よい内容だった。おにぎりの歴史も説明され、人気おにぎり店の具材の組み合わせを紹介するホームページのＱＲコードを紹介していたのもよかった。日本発のおにぎりで世界に打って出た経営者の話に、日本のビジネスの活力を感じた。「首都圏情報ネタドリ！」は社会課題を取り上げていることが多いと思っていたが、今回のような内容は、ビジネスに関心がある人が他業界の新たな動きを知ることができると思った。私はＮＨＫプラスで見たが、その際に「米」とキーワード検索すると、金よう夜きらっと新潟「どう守る？　新潟のコメ～１等米　過去最低水準に～」も表示され、見ることができた。このような仕組みはよいと思ったが、配信の終了日が番組によって違っていて、見たい番組の配信期間が短いと感じた。

○　１０月１３日(金)の「首都圏情報ネタドリ！」を見た。専門家の意見も交え、おにぎり専門店が急増している時代背景を明確に説明しており分かりやすかった。１人でも新規参入できるという話があったが、ブームが過ぎ去ったときに失敗に終わることも多いと思う。実際の利益がどれくらいかなど経営的なことについても聞きたかった。おにぎりなどの１世帯当たりの年間消費額がここ１０年増加し、去年過去最高を記録したと、グラフを用いて紹介していたが、過去最高額の 5000 円強という金額が、果たして多いといえるのかどうか疑問に感じた。またグラフの「おにぎり・その他」という表記が何を指すのかも分からなかった。おにぎりの歴史で、“江戸時代のモバイルフード”という表現で紹介していたが、違和感を覚えた。全体的には、おにぎりを通して時代を映しており、分かりやすく楽しい番組だった。

（ＮＨＫ側）　参入しやすさの根拠として、広いスペースが必要ないことや設備投資も比較的軽微ですむことに触れたが、新規参入が多いと過当競争になるリスクもあるので、伝え方には留意したい。“モバイルフード”という表現はとっつきやすさをねらったものだった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫプラスの見逃し番組配信は全国放送番組が７日間、地

域向け放送番組が１４日間以内だが、「首都圏ネットワーク」など午後６時台のニュース番組の配信は７日間となっている。

○　１０月１２日(木)の所さん！事件ですよ「富士山に登らない！？　驚きの観光アイデア」を見た。富士山の下山ツアーや婚活スナックなどの興味深い取り組みが紹介され、観光にも多様性が出てきていると感じた。青森ねぶた祭でのプレミアム観覧席など、高齢化や人口減少による担い手不足の解消や祭の存続に寄与するような取り組みを知りことができ、勉強になる番組だった。

○　私がすべてのテレビ番組の中で一番好きなのは「ブラタモリ」だ。歴史や地理が分かるすばらしい番組なので、子どもや学生にももっと見てもらいたい。有名な場所を取り上げることが多いが、地域の小さな城跡などにも実は驚くような秘密があるというような取り上げ方もあってよいのではないか。校庭に前方後円墳がある高校があるが、それを知らない地元の生徒もいるという話がある。そのような場所を取り上げると、子どもたちも関心を持って見ることができて、おもしろいと思う。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局

２０２３年９月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、長野放送局の取り組みと今後の予定について報告があった。その後、知るしん　信州を知るテレビ「まだ、あきらめない～３５歳医師ボクサーの闘い～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	泉田　佑子（書家）
副委員長	田中　裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
委　員	飯島　禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	石塚　　愛（横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト）
	坂内　剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	轟　　直希（長野工業高等専門学校工学科都市デザイン系准教授）
	中村　敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田　千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜知るしん　信州を知るテレビ「まだ、あきらめない～３５歳医師ボクサーの闘い～」
（総合　６月１６日(金)放送＜長野県域＞）について＞

○　冒頭での躍動感のあるカメラワークやテロップ使いもよく、クイーンの曲にもなじみがあり、ワクワクしながら見た。壁にぶつかる時期、試合での敗退、後悔、再挑戦というストーリーが視聴者に勇気を届け、「まだ、あきらめない」というタイトルはぴったりだった。トレーナーの塚本勝弘さんやジムに通う女性のエピソードは、主人公である土屋良真さんを別の視点から見るのに効果的だった。塚本さんからはボクシングへの信念がしっかり語られ、その塚本さんから「覚悟が足りない」など厳しい言葉をかけられていた土屋さんだが、往復２時間もかけて練習に通う時点でかなりストイックだと思った。番組中、白色のテロップの字体が細く、背景によっては見にく

いところがあった。

○　ボクシングを知らない視聴者に対しても語句をテロップなどで丁寧に説明しており分かりやすいと感じた。ラウンド仕立ての構成にはめりはりがあった。最初は、「メンタルの部分や仕事へのモチベーションが、ボクシングをやっていることで保たれている」という土屋さんの言葉の意味が分からなかったが、見終えて、自分がいつしかどこかに置いてきてしまった本気でがんばれる何かを土屋さんは今でも追い続けている、まだまだ夢を追える、そのような勇気をもらえる番組だと感じた。今回はジムの人たちを丁寧に紹介していたが、職場の理解もあってのことだと思う。そのあたりも長野県内のスポーツニュースなどで取り上げてほしい。

○　全体としてとてもよい作品になっている印象だった。視聴者の受け取り方は、それぞれの価値観によっていくつも考えられると思った。「まだ、あきらめない」というタイトルから、試合には負けると想像でき、実際にそうなったが、土屋さんの「ボクシングの何が好きか分からない」という言葉に引き込まれた。自分探しをしていると感じた。試合に負け、今まで感じたことのない感情の末にこのままでは終われない、やはりボクシングが好きだと気付いたところはとても人間くさく、共感できた。ナレーションの南海キャンディーズのしずちゃんの締めくくりのコメントがもう少しあれば、なおよかったと思う。

○　長野県にこのような威風の人がいると分かっただけでも価値があった。４浪までして医師になったという背景にも感動した。医師には何の役にも立たないと言いながらもボクシングを続ける本人の話にはリアリティーがあり、おもしろかった。試合では、セコンドが大きい声で叫んでいたが、自分の選手の弱点を言っているようだなどと思いながら見た。

○　オープニングのクイーンの曲は躍動的で、年齢に関係なく、自分の目標に向かうことの大事さを思わせた。ナレーションのしずちゃんはボクシング経験者でもあり演出としては正解だったと思う一方で、抑揚のない話し方にもの足りなさを感じるところもあった。ラウンドごとに構成するアイデアはおもしろかったが、もっとめりはりをつけたほうが一つ一つが生きたと思った。職場である病院の関係者や家族から見た主人公のふだんの様子などが聞けると、医師がボクサーとして奮闘していることをより一層深く理解できたのではないかと思った。

○　土屋さんがボクシングを始めて１０年、プロテストが区切りと言っていたが、プロテストに合格したらプロとして試合に出るという目標ができ、デビュー戦に負けたら、

勝つまでは終われないとなった。目標ができることでモチベーションが上がり、次のステップを目指して情熱も注ぐようになったのだと思う。一方で、現実では、二足のわらじはなかなかうまくいかないと感じた人も多いと思う。トレーナーの塚本さんは、家庭を優先するためにボクシングをやめる苦渋の決断をしたが、後悔もあると語っていた。土屋さんは、後悔しない人生を送るためにも、本業もボクサーも頑張るのだと感じ取れた。

（ＮＨＫ側）

テロップが見にくかった点は、今後気をつけたい。「知るしん　信州を知るテレビ」では、新たなナレーターの開拓も意識しており、今回はしずちゃんを起用した。自身がボクシングに挑戦した人なので、そのような意味で角度の違うコメントを考えることもできたかと思った。めりはりのつけ方でいえば、土屋さんは自ら本心を吐露するタイプではない中、トレーナーや女性の後輩ボクサーへの取材、飲み屋でのシーンなどで工夫したが、しずちゃんのナレーションとは別に読み手を立てる構成もありえたかもしれない。

○　ラウンドが進むにつれ話に引き込まれていく感覚を覚えた。時折入るスロー映像、フォーカスを徐々に合わせていく映像も格好がよかった。デビュー戦で負けたシーンの後の少し欠けている月の映像も印象に残った。ジムの３人のプロボクサーを紹介するテロップが、土屋さんだけ「さん」付けで表記されていたことに違和感があった。土屋さんの弱気な振る舞いや発言から、負けて終わるというストーリーが私の中で想起されたが、最後にドラマが待っていて、プロとして勝つまであきらめないことに転換していった。土屋さんだけでなく、ボクサーの道をあきらめてトレーナーになった塚本さんの思い、他のジム利用者の声が加わることで、「まだ、あきらめない」をより明確に打ち出せていたと思う。

○　本業１本では得られないものを副業から得るという選択の可能性を示唆し、人生をより豊かにするヒントになり、勇気がもらえるような価値のある内容だったが、もの足りなさも感じた。全体的に精神面への掘り下げが足りず、医師とプロボクサーというギャップも表現しきれていないように感じた。「まだ、あきらめない」という気持ちはどこから出てくるのか、悔しいというのはどこが悔しかったのか、ボクシングを始めたきっかけ、プロボクサーになった本当の理由、医師を続けることの葛藤など、本人の口から真意を聞きたかった。医師として鬼気迫る場面も見たかったし、あきらめない心の本質を突き止めてほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

場所やタイミングを変えてインタビューする方法もあったかもしれないが、土屋さんは医師として多忙で、プロデビュー戦まで時間がない中、気を遣って取材を行った。主人公の心情を感じさせるよう欠けた月などの映像を挿入した。

＜放送番組一般について＞

○　９月１１日(月)と１２日(火)の「ひるまえほっと」を見た。１１日(月)は、元新幹線運転士の中村信雄さんが集めた関東大震災で奇跡的に生還した２人の貨物列車機関手のインタビューを紹介していた。証言が克明に残っており、当時の写真や資料による構成はとても分かりやすかった。中村さんが「ここで地震が起こったら自分は何をすべきか考えるようになった」と語っていたが、災害の体験談が後世の人の知恵になるとはこういうことだと思った。関東大震災は来年も再来年も報道する意義がある。貴重な体験談を伝え続けてほしい。１２日(火)は関東大震災から 100 年を機に、被災の様子を撮影したガラス乾板をカラー化する取り組みを紹介していた。ガラス乾板が現代の技術で一気に立体的になり、発災時の緑地の有効性や国を挙げ復興に取り組んでいた様子が読み取れた。白黒とカラーを比較する見せ方には工夫があると、より分かりやすかったと思う。防災・減災報道はＮＨＫの役割でもあるので、今後もカラー化で分かったことを取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

列車の被害の事実確認は難しかったが、時間をかけて解き明かした。ガラス乾板のカラー化は、それによりわが事のように考えられることが成果だと思う。関東大震災から 100 年のタイミングだけでなく、これからも貴重な証言記録や資料を発掘して折を見て伝え、防災・減災に努めたい。

○　９月１日(金)の知るしん　信州を知るテレビ「丸山智己がゆく！　大地を食べ　食を育む」を見た。俳優の丸山さんが、信州の食の達人の仕事と生き方をめぐり学ぶ番組だ。１人目の達人は料理人の北沢正和さんだった。近くの野や山で採れる食材にできるだけ手を加えず、食材の組み合わせをいかす食の原点を知り、複雑な調味料を組み合わせる日ごろの食事を考えさせられた。２人目の達人は天然酵母パン作りの甲田幹夫さんだった。実際店に行くと店員も客も若い人が多く、なぜだろうと感じていた

が、甲田さんが師匠として慕われ200人以上が巣立っていると知り腹落ちした。２人目紹介のときだけ丸山さんが撮影した写真が出たことには唐突な感じを受けた。丸山さんならではの視点で、どのようなことが興味深かったのか、メッセージを添えると効果的に映ったと思う。

○　９月１１日(月)のクローズアップ現代「“ジャニーズ性加害”とメディア　被害にどう向き合うのか」には考えさせられた。元民放プロデューサー、元ＮＨＫ歌謡・演芸番組部長が顔を出して当時を振り返る様子に本気度を感じた一方で、2004年の最高裁の性加害の事実確定をなぜしっかりと報道しなかったのかという点には納得する回答がなかった。ＮＨＫの元記者からは「ニュースで扱うに値しないと考えていた」という声があったが、そのように判断した背景にしっかりと向き合ってほしい。一般企業で権力のある者が多数の社員に性加害をしていても、当時はニュースにする基準に足りていないのかと考えるとそうではないと思う。「判断が甘かった」ということばは無責任に感じた。何もしようとしなかったのか、しようとしてもつぶされてしまう構造があったのか、今回の問題に限らず、そのようなことがメディア業界にあるとすれば、番組で弁護士も指摘していたが、しっかりと組織の仕組みに落とし込むことが必要だと思う。二度と見過ごすことのないよう、メディア各社に先駆けて広く国民に発信し、国際的に傷ついた国内メディアの信頼を取り戻してほしい。

○　９月１１日(月)のクローズアップ現代「“ジャニーズ性加害”とメディア　被害にどう向き合うのか」を見た。私は2004年の最高裁の性加害事実の確定を知らなかった。メディアが大きく取り上げなかったことが原因かと思った。ゲストの弁護士が「まだまだ突っ込み不足で、徹底な事実調査が必要だ」と発言していたが、今後も徹底的な調査をすることがＮＨＫの責務だと思う。メディアが監視をする意味でも再発防止に努めてほしい。

（ＮＨＫ側）

ジャニーズ事務所の外部専門家による再発防止特別チームの調査報告書でもメディアの責任が指摘されている。当時なぜ伝えなかったのかを十分に説明できない状況自体が、この問題を受け止めきれていなかったことを表していると思う。この番組だけでは不足しているという指摘はそのとおりだと思う。一過性の対応にならないようしっかり発信をしていきたい。重く受け止めている。

○　９月４日(月)の映像の世紀　バタフライエフェクト「関東大震災　復興から太平洋

戦争への１８年」、８月３０日(水)のクローズアップ現代「集団の“狂気”なぜ～関東大震災１００年“虐殺”の教訓～」を見た。震災から戦争へ至る過程が印象に残った。一般市民の防災訓練が空襲の訓練に成り代わり、朝鮮人に対するデマの話なども取り上げられていた。日本の歴史の負の事実についても伝えることはよいことだと感じた。

○　「ラグビーワールドカップ２０２３」の中継など、さまざまな場面でＮＨＫプラスの案内を見るようになった。分かりやすくＮＨＫプラスを案内していて、よい情報発信の仕方だと感じた。

○　９月１１日(月)の「ほっとぐんま６３０」について、番組の見出しに「災害を伝える伝承碑」とあり、地元に住んでいてもどこに伝承碑があるのか知らず、災害の歴史を知る意味でも興味深いと思いＮＨＫプラスで見たが、その内容の企画は放送されていなかった。見出しと内容が合っていなかったので、改善をしてほしい。

（ＮＨＫ側）

９月１１日(月)の「ほっとぐんま６３０」は、当日急きょ別のニュースに差し替えたため、見出しにあった企画が放送できなかった。「災害を伝える伝承碑」の企画は放送日を調整しており、決まったらお知らせする。

○　９月１０日(日)の首都圏いちオシ！「らんまんファンミーティングｉｎ練馬」を見た。連続テレビ小説「らんまん」を楽しく視聴しているので、このファンミーティングも非常におもしろかった。話の流れが練られ、ゲストの要潤さんに演じたキャラクターの印象的なセリフを言わせるのも、いわゆる“お約束”ではあるが心地よかった。脚本家の話を聞いてドラマがより深く理解でき、今後のドラマが非常に楽しみになった。司馬遼太郎さんは史実の中に架空の人物を登場させて歴史をおもしろく見せるが、「らんまん」も同様に史実とフィクションを絶妙に取り混ぜていると感じた。主人公の槙野万太郎は実在の人物名を少し変えた架空の人物だが、実業家の小林一三が実名で登場したのはなぜかなど、さまざまなことが気になったので、続編のようなものがあるとより楽しめると思う。オープニングの武蔵野音楽大学の学生による主題歌の演奏はもっと聴きたかった。

（ＮＨＫ側）

トークイベントには１０倍近い申し込みがあり、来られなかった人のためにもエッセンスをお届けし、多くの人に見ていた

だきたいと思い放送した。

○　＃金曜やまなし「天に選ばれし名水の地　山梨　春・八ヶ岳紀行」の７月１４日(金)の「前編」と７月２１日(金)の「後編」を見た。乾いた土地で農作物を作ることは大変難しいが、湧き水から水路を造り、ふもとまで水を引いた田んぼで米を作り、暮らすことができるようになったことを伝えていた。エネルギーと水を自給自足する実証実験や、150 年以上造り続けている酒蔵も取材していたが、まさに八ヶ岳の水を使って業を成している様子が分かる番組だった。ＢＧＭは作曲家の高梨菖子さんのピアノ演奏で始まったが、水がせんせんと流れるありさまを表現し、非常に効果的だった。ナビゲーターの俳優・山本匠馬さんとナレーションの声優・若本規夫さんの掛け合いが何とも言えず、軽快で愉快だった。楽しく水を学べ、金曜夜７時半の番組としてぴったりだった。湧き水の仕組みをアニメーションで解説していたのも分かりやすかった。「前編」で水路が交差する場所を取材していたが、水量が少ないからといって多いほうから横取りすることはせず、近くを通っているからといって別の地区の水を使うことはしないということだった。自分たちの立場を主張するとともに相手の立場も尊重し、折り合いをつけるすべをこの地域の人たちは昔から持っていたと感じた。

○　８月２４日(木)の【ＮＨＫ地域発】とちスペ「ものづくりの哲学～ドローン開発者五百部達也～」を見た。このような人が地域にいたと知ることができてよかった。ドローン技術は過疎化が進む山間地、大雨で孤立した被災地での活躍などが見込まれ、物流も変える大きな役割を持っている。五百部さんはすべてのことを自分一人でやってしまうように見えたので、後継者についてどのように考えているのか知りたかった。

（ＮＨＫ側）

後継者については、個人として突出しているがゆえの難しい課題だと思うが、だからこそ視聴者の関心もそこにあると思う。いただいた指摘を今後の番組作りに生かしたい。

○　９月１日(金)のかんさい熱視線「悲願の“アレ”へ　鍵握る“岡田猛虎”の哲学」を、阪神タイガース・岡田彰布監督の手腕に興味を持って見た。岡田監督は喜怒哀楽を顔に出さないが、この番組でも淡々と、当たり前のことを当たり前にやる、ビッグプレーよりも堅実なプレー、大きな成功よりも失敗を減らすことで優勝を成し遂げたとのことだった。チームは若手が中心で、選手とのコミュニケーションは以前と大きく違ったにもかかわらず、選手の心をつかんだことに共感した。

○　８月３０日(水)の第９０回ＮＨＫ全国学校音楽コンクール　埼玉県コンクール「本

選」（Ｅテレ　３０日(水)前 0:55～2:41)を見た。神奈川県、千葉県、東京都との４日連続放送は画期的で、各日とも編集に工夫があった。合唱中に学校名のテロップが出たが、金賞、銀賞、銅賞などを加えてもよかった。賞を認識しながら聴くことも勉強になるからだ。課題曲を初めて聴いたが、金賞校などで歌詞を表示すると、曲の理解が深まると思った。テレビでの放送では見て学べることがたくさんあると感じた。学校ごとに人数、構成がさまざまで、並び方、歌う姿勢、表情などがよく分かった。南関東１都３県の地区大会参加校は大変多いそうだが、これまではＦＭ放送しかなかった。今回はテレビで１都６県向けに放送され、ＮＨＫプラスでの配信もあった。遠方で見ることもでき、子どもたちの活躍を多くの人が見られたのは、よいサービスだったと思う。

（ＮＨＫ側）

歌詞の表示などについての意見は今後の参考にしたい。埼玉県では 2022 年に比べると参加校が１０校増えた。今年の経験を踏まえ、テレビでの放送を継続できないか検討したい。

○　７月２３日(日)の小さな旅「青春の水面（みなも）～埼玉県戸田市～」を見た。東京大学の話は興味深かったが、地元埼玉県の高校にもいくつかボート部があるので、その話題も取り上げてほしかった。冒頭で高校生の大会にいあわせたのに、ほとんど触れなかったのは残念だった。学生とそば屋との関係を取り上げたのはよかった。さいたま放送局には埼玉県内の話題、埼玉県に住む人たちに関するものをたくさん取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

東京大学と京都大学の歴史的なマッチレースを掘り下げたため、高校生の取り上げまで至らなかった。もっとさまざまな人を取り上げてほしかったという意見は担当者と共有する。

○　今年の新潟県は記録的な猛暑で、熱中症警戒アラートが毎日のように発表された。猛暑についても水害、地震と変わらない災害として捉える必要があるように思う。総合テレビの画面上に注意を表示するなどの工夫がされ、ニュース番組の気象情報で繰り返し注意喚起がされ、とても役立ったと思うが、繰り返されているうちに受け取るほうはだんだん慣れて気に留めなくなっていくので、呼びかけ方には工夫が必要と感じた。部屋の気温に意識を向けさせるなどの現実的な工夫に期待する。農業をはじめさまざまな業種に被害が出ているので、問題提起も含めた深い取材で地域の人たちに寄り添う報道をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）　放送では熱中症の警戒を呼びかけることに重点を置き、体調管理の注意点などを連日伝えた。一方で、毎日同じようなニュースを繰り返したという反省点もある。今後さまざまな場所、シチュエーションでの気温を測定する、改めて医師などの専門家に危険性、注意点をインタビューするなど、取材、伝え方の工夫を心がけたい。記録的な気温の上昇に対しては今後も災害ととらえて、命と健康を守るための報道に力を入れたい。暑さと水不足の影響は新潟県の基幹産業である農業に重くのしかかると思う。取材を掘り下げ、対策、支援のあり方を考える材料となるような企画、番組を検討したい。

（ＮＨＫ側）

熱中症警戒アラートの画面左上の表示は今年から始めた。数年前から台風、地震などのときに“逆Ｌ字表示”で伝えていたが、それでは画面がとても見づらいという指摘があり、それを考慮した。来年は熱中症の特別警戒アラートが運用される予定だ。表示の色など、警戒の段階に応じて視聴者に適切な注意喚起ができるよう工夫したい。

○　９月２日(土)のブラタモリ「長岡～“花火の町”は不死鳥の町！？～」と、９月９日(土)のブラタモリ「燕三条～燕ＶＳ．三条　モノづくりの町　発展のカギとは？～」で、２週にわたり新潟県が取り上げられた。地元への影響は大きく話題になったが、放送を知らず残念がった声も多く聞かれた。事前のＰＲが足りなかったのではないかと思う。また番組に関連するさらなる地域サービスがあってもよいと思った。

（ＮＨＫ側）

放送前日の金曜日に「新潟ニュース６１０」でお知らせし、新潟放送局のホームページにも番組案内を掲載したが、それでは足りていなかったかもしれない。全国放送の人気番組は地域に活気をもたらすきっかけになるので、本部の関係部局と連携し、もっと広く多彩に広報できるよう努力したい。

○　７月１２日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で柔軟剤などの香りによる体調不良の相談が増えているというニュースを伝えていた。環境問題にもつながるとても重要な問題だと思うので今後も注目し続けてほしい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局

２０２３年７月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２１日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、２０２３年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、続いて、横浜放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、「いのち輝く　横浜こどもホスピス１年」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後２か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	尾形　玲子（養蜂家、ひふみ養蜂園(株)代表取締役）
副委員長	泉田　佑子（書家）
委　員	飯島　禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	坂内　剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	田中　裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
	轟　　直希（長野工業高等専門学校　工学科都市デザイン系准教授）
	中村　敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田　千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜「いのち輝く　横浜こどもホスピス１年」
（ＢＳ１　２月１８日（土）放送）について＞

○　胸を打たれた。命にかかわる病気と闘う子どもが集まるデリケートな現場の取材で、新型コロナウイルスのリスクにも配慮しながら、撮影には大変な苦労があったことと思う。２人の子どもの初めての利用日に立ち会い、子どもたちはカメラに警戒せず笑顔で撮影クルーに話しかけていて、信頼が得られていることを感じた。こどもホスピスに通っていた恵麻ちゃんが亡くなった場面のあと、両親が胸の内を語っていたが、夏物から冬物に服装が変わっていたので、両親の気持ちに配慮して時間を空けて取材したことが分かった。両親がつらい気持ちを話してくれたのも信頼関係があってこそ

で、信頼を得ることが番組を作るうえで大切なことだと思った。あえて音楽を控えめにし、子どもの明るい声を多く拾っていて、子どもたちが楽しい時間を過ごしていることが伝わってきた。また、場面の変わり目に横浜の景色や施設の全景の映像を挟むことで、落ち着いて見ることができた。発言者により色分けしたテロップはとても分かりやすく、番組タイトルを囲む色がテロップの色にリンクして見え、こどもホスピスを支える人たちを表しているようにも感じた。子役で活躍していた俳優の新津ちせさんの語りもよかったが、幼少のころの写真で紹介していて、少し違和感を覚えた。重い病気の子どもたちを支援する輪を広げるためにも、この番組を多くの人に見てほしい。

○　番組を見て、こどもホスピスの理解促進の機会を増やしていくことが重要だと感じた。寄付で賄われているという紹介があったが、行政などのしっかりとしたフォローが必要だと感じた。重い病気の子どもを支える家族は、成長の過程で子どもにさまざまなことを経験させたいが、それができないというジレンマを抱えていると思う。フォローできる場が身近にあるということは、家族にとってありがたく、すばらしいことだと感じた。医療従事者からも好意的な意見があり、子ども本人、家族、医療従事者など、すべての人たちのためにこのような場は必要だと感じた。目を背けてはいけないテーマだが、番組のタイトルだけを見ると、苦しいエピソードを見るのがつらいという思いから、視聴をためらってしまう人がいると思う。近隣地域の課題や、日頃から関わりが深い年代の子どもを取り上げた番組であれば、自分のこととして視聴すると思う。どのように寄り添えるのかを考えることは大切だという気付きを得ることができ、視聴してよかったと思える番組だった。

○　このような施設が増えるとよいと思う。医療従事者が、治すことができない病気の子どもへどう寄り添うのかと話していたが、こどもホスピスが「子どもにやりたいことを思い切りやらせてあげられる場所」となっていることがよく分かった。このようなテーマをしっかりと発信できるメディアはＮＨＫだけだと感じた。ニュースや番組などを通じて内容をブラッシュアップしながら繰り返し発信できるのも、他局にない強みだと思う。完成度が高く、丁寧に作られていて、これからもこのような番組を期待している。

（ＮＨＫ側）

新型コロナウイルスの感染対策を十分にとったうえで、時間を限って取材を行った。「ホスピス」ということばが持つ看取りの場というイメージをふっしょくするため、画面の色使いなどを工夫して発信した。

○　当初は、番組のタイトルからつらい内容を想像して視聴をためらったが、見てよかったと思える番組だった。こどもホスピスについて知ることができたことは貴重な機会だった。重い内容ではあるが、明るいイメージで進行していたのはよかった。闘病の様子から病気の大変さが分かり、こどもホスピスで過ごす時間を「楽しい」と話す子どもの姿を見て、ことばでは表せない気持ちになった。子どもを亡くした経験からこどもホスピスを立ち上げた代表の田川尚登さんの話を聞いて、支援していく必要性を感じた。子どもの病気について改めて考えるきっかけになり、番組を見てよかったと感じた。このような問題提起はＮＨＫだからこそできることだと思うので、今後も期待している。

○　「ホスピス」ということばに暗いイメージの先入観があり、生と死について取り上げることは重く感じたが、親子の心の内がかいま見え、人間味を感じる番組だった。自分の居心地のよい場所を見つけることの大切さを感じ、番組に出演してくれた恵麻ちゃんや両親に敬意を表したい。このような施設が全国に２つしかないことや、命にかかわる病気の子どもが全国に２万人もいることを知り、驚いた。新津ちせさんの語りを聞いて、元気に芸能界で活躍している子どもと、命にかかわる重い病気の子どもが対比して映ってしまったのは気になった。また、重い病気の子どもの表情をただ明るく取り上げてもよいのか、難しさも感じた。番組のタイトルに掲げているので、こどもホスピスをめぐる制度などについてももう少し触れるとよいと思った。

○　看取りの場所という印象を持って見始めたが、子どもたちの笑顔や喜ぶ姿を見ることができ、ポジティブな考え方になれた。恵麻ちゃんの両親の「運命に関しては納得いかないが、やるべきことはできた」ということばは、深く印象に残った。こどもホスピスの運営の手伝いを始めた恵麻ちゃんの母親は、当事者の視点から利用者の気持ちに寄り添うことができるだろうと思った。施設の運営費の問題について、現状の制度がどのようになっているのか知りたくなったので、今後はそのような部分も含めて取材を続けてほしい。

（ＮＨＫ側）
より多くの視聴者に身近に感じてもらえるよう、同じ世代の子どもである新津ちせさんを語りに起用した。

○　命の重さや子どもの幸せについて、深く考えさせられた。2022 年６月に「首都圏情報　ネタドリ！」でこどもホスピスを取り上げた際にも視聴し、当時は施設が完成するまでの経緯が分からなかったが、今回はそれも含めて全体像がよく分かった。全体

を通して、番組に登場する人たちの心に配慮し、過度に感情をあおらず丁寧に作られていると感じた。語りもすばらしく、自分のこととして問題意識を持つことができた。医師が、こどもホスピスの存在を多くの人に知ってもらうために紹介動画を作ったらどうかと話していたことも共感を呼ぶもので、ほかの施設へのよい提案になったのではないかと思う。こどもホスピスの現状はよく伝わったが、必要な支援や、ほかの施設の状況、資金援助の方法など、多くの課題が気になったので、継続的に取材して社会に問いかけてほしい。このようなテーマについて社会全体が認知し、問題意識を持つことができるよう、集中的に特集を組んで伝えることが大切だと思う。公共放送の役割として、子どもたち一人一人の命の重さを考える番組を届けてほしい。

○　子どもの視点の語りがよかった。恵麻ちゃんの笑顔を低い視点のカメラで撮影していたこともよかったと思う。恵麻ちゃんが亡くなる前日まで楽しく遊んでいた様子から、施設の存在意義が伝わってきた。心臓病の治療のためにさまざまなことを我慢し続けてきた桃さんの母親が、こどもホスピスで笑顔になる様子もよく分かった。施設のスタッフが主治医のもとまで相談に行き、きめ細かいケアをしている姿を紹介していて、とてもよかったと思う。主治医の「桃ちゃんが幸せになるようなことをしましょう」ということばに、母親が「でも何をしたらよいのですか」と聞く場面は、非常に印象的だった。制度の問題で国からの支援がないという課題も伝えていて、社会への問題提起になると思った。恵麻ちゃんを亡くした両親の前向きな姿を紹介していたこともすばらしく、特に、母親が施設の手伝いを始めたというエピソードに心が救われた。丁寧な配慮をしながら撮影を行った制作担当者の思いも知りたくなった。

○　日本におけるこどもホスピスの重要性を改めて感じた。闘病中の子どもたちと家族には、何よりも安心・安全を感じることができる場所が必要で、子どもが子どもらしく過ごせることや、その姿を家族と共有できることが重要だと痛感した。子どもたちや家族の楽しそうなありのままの姿を映し出していて、こどもホスピスの温かさを感じた。こどもホスピスは看取りの場ではなく、子どもたちが自分らしく輝ける場所であり、家族の支えとなる存在であることが伝わってきた。代表の田川さんの思いもよく分かり、とても意義のある内容だった。この施設ができたことをきっかけに、日本中でこどもホスピス設立に向けた一大ムーブメントが起きている。各地域放送局には、その地域の機運を高める後押しを期待したい。また、この番組を制作した横浜局には、こどもホスピスが抱える課題なども含めて番組にまとめ、全国に発信してほしい。

（ＮＨＫ側）

全国各地でこどもホスピス設立に向けた動きがあるが、資金

面の課題から、大きなきっかけがないとなかなか進まないのが現実だ。そのような動きの後押しになるよう、これからも取材を続けていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月２３日(金)のぐんまスペシャル「デジタル時代到来　どうなる？　群馬の未来」を見た。群馬県や前橋市は、国の「デジタル田園都市国家構想」のモデル地域に選ばれているが、県内の認知度は低く、理解を深めるという点で意義のある番組だったと思う。タレントのＪＯＹさんと原口雅臣アナウンサーの表情を映しながら進行する演出もよかった。ただ、テロップの文字のデザインに統一感がなく、分かりにくいのではないかと気になった。前橋工科大学の理事長が、「問題を解決するのではなく、自分で問題に気付いて定義する人材がこれからは必要」と話していたのは印象的だった。最後に、デジタル技術を使った原口アナウンサーのアバター「ＮＥＸＴマサオミ」が登場していたが、このアバターを今後はニュース番組などでデジタル情報の発信に活用するのもよいのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

群馬県はデジタルトランスフォーメーションに力を入れているが、県内に住む人たちはデジタルの知識に詳しくないこともあり、分かりやすく伝えたいという思いで放送した。テロップが分かりにくいという指摘は真摯（しんし）に受け止め、現場と共有したい。「ＮＥＸＴマサオミ」の活用についても検討したいと思う。

○　６月３０日(金)の首都圏情報 ネタドリ！「異国の“ガチグルメ”からニッポンの今が見えてきた」を見た。海外の本場の味を楽しめる郷土料理店で、その国の人たちのコミュニティーが形成されているという話は、自分の近隣地域にも実際にある事例だと思った。日本が労働力不足に直面する中、アジア各国から多くの人が就労目的で来日しているが、地域で共生しながら日本の社会が成り立っていることが理解できた。

（ＮＨＫ側）

食事を切り口にして、日本に住む外国の人たちの暮らしを紹介した。

○　７月７日(金)の金よう夜きらっと新潟「佐渡に舞う奇跡の鳥～トキ　その知られざる姿～」を見た。トキを連想させるタイトルの文字が美しく、トキの生態についてさまざまな知識を得ることができた。昨今、森を造ることが自然を取り戻す方法の１つとされているが、トキが生きていくためには、人間が農業をしながら生活する古くからの里山の環境をよみがえらせる必要がある。そのことをもう少し強調するとなおよかった。また、トキ保護センターの獣医の金子良則さんから、施設にテンが入って多くのトキが襲われてしまい、心ないことばを数多く浴びせられたという話があったが、施設の管理者ではない１人の獣医が責任を背負い込んでいるように見えてしまったので、もう少し表現のしかたを考慮したほうがよかった。番組の最後にトキの鳴き声で終わる場面は深く印象に残った。

（ＮＨＫ側）

トキに魅せられた制作者が、長期にわたって映像記録を続けている。生態に影響を与えないように細心の注意を払いながら撮影をする必要があるため、トキの生態を扱った番組は貴重だ。今回はトキの生態を中心に取り上げたため、里山の話についてなかなか踏み込めなかったが、非常に重要な話だと思う。テンのエピソードについても、追加取材をしたうえで今後の番組に結びつけたい。

○　７月７日(金)の金よう夜きらっと新潟「佐渡に舞う奇跡の鳥～トキ　その知られざる姿～」を見た。感動的な番組で、石井由貴キャスターと新潟局キャラクターの「ときたん」を案内役に起用している点に親しみやすさも感じた。佐渡の人たちが自然と共生する暮らしを送ってきたからこそ、トキが復活を遂げたということがよく分かった。獣医の金子さんの「考えるな、感じろ」ということばは、自然と共存するための極意として伝わってきた。トキを知ることは生物多様性を知ることにつながると思う。トキの復活劇を通して、佐渡の人々の営みの価値を広く発信できるよう、全国放送に期待したい。また、新潟局の「トキ点描」のホームページでは、胸を打つようなトキの写真や映像を紹介しているので、多くの人に見てほしい。ただ、冒頭の「絶滅から奇跡の復活を遂げて１５年」というコメントは、「放鳥から１５年」ではなく「絶滅から１５年」だと誤解を生む表現ではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

地元の公的機関で使用している表現を参考にしたコメントだったが、放鳥により復活したという事実も踏まえ、今後はより混乱のない表現を心がけたい。

○　７月７日(金)の茨城スペシャル「大丈夫？茨城の保育施設」を見た。「茨城スペシャル」がＮＨＫプラスで見られるようになったので、帰宅が遅くなったときでも番組を見ることができて便利になった。しっかりとした取材で問題の本質を突いていて、茨城県ならではの事情も分かり、よく理解できた。ただし、「認可保育園」と「認可外保育園」の違いがやや分かりにくく、もう少し詳しい説明があるとなおよかった。行政の監督に関する課題や、よい保育施設はコミュニケーションが活発だということ、人材確保や財政面の問題など、保育以外の業界にも共通する話が多くあり、納得した。保育士に限らず、給与を度外視して働く時代ではないという問題提起も感じた。また、給与の差から遠方で働く保育士が多くいることや、千葉県柏市の保育士獲得に向けた手厚い制度には驚いた。保育士の人材確保に向けて、茨城県が今後どのように対応するのかが気になった。

（ＮＨＫ側）

今年度から始めた新しいシリーズで、夕方のニュース「いば６」で取材を重ねたテーマを２７分の番組にしている。用語の丁寧な説明など、頂いた意見を次のシリーズに反映させ、よりよい番組にしていきたい。

○　７月７日(金)の＃金曜やまなし「藤原、貸してみたｉｎ山小屋」を見た。甲府局の藤原優紀アナウンサーが体当たりでさまざまな人をお手伝いするという新シリーズだ。藤原アナウンサーが山小屋の仕事に奮闘し成長していく様子が、とても温かく感じられた。また、藤原アナウンサーの素朴なキャラクターが際立っていて、親しみを感じた。１日が終わるたびに手書きの日記で振り返る演出は、とても効果的な手法だと思う。山小屋の主人が３日間の仕事の評価をグラフにして渡していて、山小屋の仕事に必要なことが分かるという点でもとてもよかった。ただし、「藤原、貸してみた」というタイトルはものを貸すような表現に感じられ、やや違和感を覚えた。山梨県に住む人たちの期待に応え、地域発信の質を十分に高める内容の番組だと思う。視聴者が甲府局に親しみを感じられる、地域に密着した企画だった。次回の放送にも期待している。

（ＮＨＫ側）

この番組は大変反響がよく、今後も続けていきたいと考えている。タイトルについては藤原アナウンサー本人の意見も踏まえて決めた。

○　７月１４日(金)の首都圏情報　ネタドリ！「人生が豊かに！？変わる“寄付のカタチ”」を見た。“見返りのある寄付”が増えていて、バーで寄付先を指定して飲み物を注文するとその一部が寄付に回る仕組みなど、さまざまな方法で寄付を募る工夫がされていることが分かった。ただし、寄付のリターンについて、企業の場合は投資と捉えられかねないこともあると思うので、“見返りのある寄付”と投資の違いについても触れられるとなおよかった。また、寄付金控除の申告方法などの簡単な解説があってもよかったと思う。

○　７月１４日(金)の首都圏情報　ネタドリ！「人生が豊かに！？変わる“寄付のカタチ”」を見た。飲めば飲むほど寄付につながる“キフバー”を見て、新たな社会貢献の形として可能性を感じた。また、遺産をＮＰＯ法人などに寄付して役立ててもらおうとする“遺贈寄付”は、共感を集めやすい寄付の形式だと思った。今回の審議会で取り上げた「いのち輝く　横浜こどもホスピス１年」でこどもホスピスの財政面の課題について触れていたが、このような形の寄付も活用し、運営費を補えるとよいのではないかと思った。番組どうしの連携ができると、共感する人が増えるのではないか。最後に紹介していた「企業版ふるさと納税」については、寄付がビジネスチャンスになるというだけではなく、注意点についてもしっかりと説明していたのがよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

新しいムーブメントを伝えた。“見返りのある寄付”と投資の違いなど、もう少し仕組みを伝えられるとなおよかったと思う。寄付と認められるかどうかの線引きについては、丁寧に伝えられるよう注意した。

○　７月１６日(日)の首都圏いちオシ！「開業５０年・ＪＲ武蔵野線の魅力」(総合 後1:10～1:50)を見た。武蔵野線の線路が隣接する工場とつながっていたり、沿線の倉庫が鉄道が止まったときに乗客をサポートする態勢を整えているというエピソードは、武蔵野線と地域の企業とのつながりを強く感じることができた。一方で、武蔵野線そのものの魅力が分かると期待させるタイトルだったが、沿線の街紹介のパートが多く、武蔵野線からは少し離れた場所なども取り上げられていた。バランスよくさまざまなことを紹介したとも捉えられるが、開業５０年にあたって「武蔵野線の魅力」とうたっているのであれば、武蔵野線が地域に与えてきた影響などを紹介するだろうと期待していたので、少し残念だった。

（ＮＨＫ側）

武蔵野線の変化とともに街の様子を届けたいという思いで放送したが、沿線地域の紹介に偏ってしまったかもしれない。いただいた指摘は今後の制作に生かしたい。

○　６月３０日(金)のファミリーヒストリー「俳優・眞栄田郷敦～父千葉真一の遺志飛躍の陰に先祖あり～」を見た。俳優・千葉真一さんのルーツがわかり、千葉さんのすばらしさを改めて感じた。父親とのつながりに疎かった息子の眞栄田さんが、自分の中にある先祖とのえにしを認識して感動する姿が見られ、とても引き込まれた。千葉県南部を治めていた里見氏に縁が深い家系であることも分かり、里見氏を取り上げたＮＨＫのドラマも見てみたいと思った。千葉県南部は台風被害があり、経済的にも疲弊しているので、そのような番組で活性化するのではないかと思う。千葉県だけでなく、全国には自然災害で困難を抱える地域が数多くあるので、そのような地域に目を向けられるとよいと思う。

○　７月１日(土)の明日へ１ｍｉｎ．防災の知恵「２階に避難は最後の手段」(総合 後10:54～10:55)を見た。災害に関する情報をコンパクトに伝えていて、アナウンサーが話すスピードなどから緊迫感が伝わり、大雨による災害が多い時期に視聴者へ注意喚起しようという思いを強く感じた。「首都圏ネットワーク」でも、被害が予想される地域に住む知人への声かけを呼びかけていて、伝え方の変化を感じた。外国人や障害がある人などさまざまな視聴者がいる中で、はっきりと分かりやすい情報を伝え、視聴者がそれを周囲の人に伝えるという情報のリレーも重要だと思った。先日、福岡県久留米市で住宅を土石流が襲い、住人が直前に２階に逃げて助かったとの報道があった。このような番組が避難のきっかけになるとよいと思う。ニュースや気象情報の前後などでも、防災の知恵を伝えていくのがよいのではないか。これからも期待している。

○　７月６日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。「西日本豪雨から５年」の特集で、兵庫県加古川市の取り組みを紹介していた。地上デジタル放送波を利用した戸別受信機を全国の自治体で初めて実用化し、山間部でも家の中で確実に避難情報が伝えられるということだった。このような防災に関するよい情報を全国へ発信してほしいと思った。

（ＮＨＫ側）　災害時に情報を知らせるツールは、地域に即したものがさまざま出てきている。全国の放送局から、地域の特性に合った方法を詳しく伝えていきたい。

○　７月１９日(水)のクローズアップ現代「独占告白　B’z　時代を鼓舞する音楽のチカラ」を見た。B’z の稲葉浩志さんの「我々は我々なりの役割がある」ということばが印象的だった。自分の役割を考えることや、継続することの大切さなど、普遍的なメッセージとして心に響いた。ポイントとなる場面で映像とマッチした見やすいテロップが入っていて、分かりやすかった。

○　７月１１日(火)の「ひるまえほっと」を見た。横浜局からのリポート「入院中の子どもに笑顔を」で、横浜市立大学の学生ボランティア団体の取り組みを紹介していた。大学生が中心となり、病院に入院している子どもたちを対象にしたオンライン家庭教師プログラムや、小児科病棟でのオンラインイベントを行っていた。入院した子どもたちは、非日常的な環境の中で、限られた人とだけ関わることが多くなる。さまざまな人と社会的なつながりを持つことや、友人のように関わる存在がいることは、成長発達のうえでとても大切だと思う。子どもたちと学生とのやりとりを見て、この団体の取り組みのすばらしさや意義が伝わってきた。ボランティア団体のメンバーが子どもたちの要望を聞いてジオラマを作っていたが、それを渡したときの子どもたちの様子も紹介できれば、取り組みのよさがいっそう伝わり、深みのある内容になったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

病気の子どもたちに気配りをしながら、楽しませようと懸命に取り組む学生たちの姿を取材した。ジオラマを渡す様子は写真で紹介する予定だったが、放送日の関係などから伝えられなかった。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局

２０２３年６月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１６日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、関東甲信越地方の災害・防災減災報道について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	尾形　玲子（養蜂家、ひふみ養蜂園(株)代表取締役）
副委員長	泉田　佑子（書家）
委　員	飯島　禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	石塚　　愛（横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト）
	坂内　剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	田中　裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
	轟　　直希（長野工業高等専門学校 工学科都市デザイン系准教授）
	中村　敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田　千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜関東甲信越地方の災害・防災減災報道について＞

○　防災意識を高めるためには、ポイントを絞ってこまめに伝えることが重要だと思う。横浜局のリポート「自主防災組織で素早い災害対応を！」を見て、「災害時に頑張るのではなく、平時に頑張る」ということばに納得した。平時に準備しておくことで、災害時に住民が自ら適切な行動を取れるようになるのではないだろうか。宇都宮局のリポート「洪水被害を防ぐ“ゲート操作”担うのは高齢化する地元住民」では、水害時に水門や樋管を操作する人たちが高齢化しているという問題をクローズアップしていた。地域の消防団と連携することができれば、解決策につながるのではないかと思った。甲府局のリポート「富士山の噴火に備える“ローカル５Ｇ”」を見て、防災分野においてもデジタルの活用は急務だと感じた。防災のためだけで

はなく、人命を守るという目的のためにも早急に進める必要があることが分かった。

○　地域放送局の防災減災報道を紹介する資料に「自分ごととして考えてもらうための工夫を凝らしたリポートを制作、放送している」という記述があった。被災者は「このような経験は初めて」と話すことが多いように思うので、それぞれの個人の経験だけを頼りにしないよう、もっと伝える必要があると感じている。６月１１日(日)の「どーも、ＮＨＫ」では、佐賀局の例を紹介していた。過去の降雨量と比較し、アナウンサーが「あのとき大丈夫だったからという経験は全く役に立ちません」と呼びかけていて、自分ごとと感じられる伝え方だと思った。首都圏局のリポート「アナウンサーが“初期消火”に挑む」も、伝え手であるアナウンサーが自ら消火器の体験をしていて、災害を自分ごととして伝える好例だと思った。これまでに発生したいくつもの災害で、地域放送局だからこそ蓄積できた教訓が多くあると思う。それらを将来に生かし、ＮＨＫの災害報道をしっかりと支えていってほしい。

（ＮＨＫ側）

首都圏ネットワークの「＃３丁目の防災」という企画では、具体的な地域にフォーカスすることで、防災情報を身近に感じてもらえるようにしている。災害発生時にも、できるだけ詳細な地域名とデータを伝え、災害を自分ごととして受け止めてもらえるよう心がけている。

（ＮＨＫ側）

より地域に根差した情報発信を進めていく必要があるが、地域を細かく設定するほど手間がかかる側面もあり、試行錯誤をしている。

○　ＮＨＫの災害情報ホームページに「＃ＮＨＫ防災これだけは」というコーナーがあり、よく見ている。災害時に最低限対応すべきことが端的にまとめられていて、大変参考になると思う。そのほか、スマートフォンのＮＨＫニュース・防災アプリや、テレビのデータ放送など、さまざまな場所に災害情報がある。掲載場所があまりにも多いので、ポイントを絞って短い動画にまとめ、各媒体からアクセスできるようにしてはどうか。

（ＮＨＫ側）

情報が散在していて分かりにくいという問題は、現在改善を目指している。

○　災害が起きる前のフェーズ、災害が起きようとしているフェーズ、災害が起きているフェーズのそれぞれで、必要とされる情報が異なると思う。どのフェーズのときに、どの媒体で、どのような情報を提供するのか、体系的に整理してほしい。

「自主防災組織で素早い災害対応を！」を見て、地域の自主防災組織で平時から災害に備えるというアイデアに共感した。昨今、自助・共助・公助のうち、共助の重要性が増していることは言うまでもないと思う。平時のコミュニティーが強固でなければ共助はできないことを再認識できたリポートだった。加えて、身近な防災組織を紹介するなどフォローがあると、番組を見た人が行動につながると思った。

また、緊急時の対応には統一的なルールが必要だと言われている。事故・事件が起きれば警察へ、火事なら消防へ電話するという教育は行き届いているが、災害発生時の行動については共通認識がないと思う。被災したときに落ち着いて行動できる人はほんのわずかだという研究もある。残りの大多数の人たちにどのように情報を届けるのか、精査してもらいたい。

ＮＨＫニュース・防災アプリを利用している。大災害時には大変役に立つが、通常の水位計よりも細かく配置されている「危機管理型水位計」の情報がないため、近隣の中小河川の水位情報が確認できず、不十分に感じている。別の媒体で「危機管理型水位計」の数値をもとにした河川の氾濫情報が入手できても、ＮＨＫニュース・防災アプリでその情報が得られないと、利用媒体により情報の格差が生まれてしまう。情報の発信元として、どこまでの情報をフォローしているのか、丁寧に説明する責任があると思う。

（ＮＨＫ側）

指摘のとおり、現状ではすべての「危機管理型水位計」の情報をカバーできていないので、より広く網羅できるように努めたい。

○　４つのリポートを見て、いざ災害に直面したときに行動をとれない可能性に気付かされた。消火器やＡＥＤなどを見たことはあっても、実際に使用できる人は少ないのではないだろうか。このような情報は定期的に発信してほしい。また、「自主防災組織で素早い災害対応を！」を見て、災害が少ない地域ほど、防災への備えが不足しているのではないかと思った。さまざまな地域の事例を伝えていくことが大切だと思った。

（ＮＨＫ側）

今回の自主防災組織の事例は、専門家ではない地域の人の独

自の取り組みであり、とても興味深い内容だったと思う。

○　「洪水被害を防ぐ“ゲート操作”担うのは高齢化する地元住民」を見て、このような課題を取り上げることに意義を感じた。緊急時に複数の人が動けるよう、属人的に役割を決めるのではなく、組織化しておくことの必要性を感じた。
　また、災害時に情報を得るツールを一般的に普及できるとよいと思う。ＮＨＫはそのような役割に秀でていると思うので、期待したい。

○　リポートで取り上げた内容を地域の特性に応じてまとめると、防災減災のバイブルとして活用できると思った。番組を視聴した人は限られていると思うので、繰り返しさまざまな時間帯で放送してほしい。
　水戸局ではプロスポーツチームと連携した防災の取り組みを行っていて、視聴者の注目を集めるよいアイデアだと思った。さまざまなパートナーと連携して取り組むことが、地域に住む人たちの命を守ることにつながるのではないか。

（ＮＨＫ側）
　板橋区と共同して取り組んでいる「実感！ハザードマップ」など、自治体との連携を進めている。ＮＨＫが入手したデータをもとに、河川氾濫時の区内各所の浸水イメージを作り、地元のプロレスラーが出演するポスターにして、それぞれの地域に貼るという取り組みだ。地域の防災のため、これからも自治体などとの連携を進めていきたい。

○　首都圏局と関東甲信越各局が連携して放送する仕組みは、有事への備えとしてすばらしいと感じた。「ＮＨＫスペシャル」「クローズアップ現代」が鳥の目のような存在であれば、地域放送局は虫の目であり、どちらも大切だ。虫の目だからこそ、地域に根差した問題解決をしていくことが重要だと思う。ライフライン情報など、かゆいところに手が届く内容を伝えていくのも、地域放送局の役割ではないか。バリアフリーの情報や、ペットを飼う人に向けた情報などもケアしていく必要があると思う。

（ＮＨＫ側）
　地元に密着して伝えていくことは地域放送局の使命だ。さまざまなことを“虫の目”のアプローチで発見していきたい。

（ＮＨＫ側）
　これまでのＮＨＫの災害報道は、どうしても行政単位になり

がちだった。地区単位のさまざまな取り組みを伝えることで、ほかの地域でも参考にしてほしいと願っている。

○　「アナウンサーが“初期消火”に挑む」を見て、単に知識を身に付けるだけではなく、経験を積むところまで訓練することが大事だと認識した。災害を経験しない間に備えられる面もあれば、経験がないことでいざというときに対応できないという面もあると思った。

（ＮＨＫ側）

伝え手であるアナウンサーが自ら企画した。生活者の視点で伝えたいという思いで取り組んでいる。

（ＮＨＫ側）

アナウンサーが予備知識なく現場に入り、災害時に実際に起きることを疑似体験し、伝える企画だ。自分に置き換えて危機感を持つことができる企画だと思うので、これからも続けていきたい。

○　「富士山の噴火に備える“ローカル５Ｇ”」は、他の多くの山々や登山者にとっても有益な情報だったと思う。「富士山ハザードマップ」の改訂など、最近の動きについても随時情報発信してほしい。

３月４日(土)のＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震「第１部　ドラマ」（総合後 7:30～8:48、後 10:00～10:54）を見直した。起こりうる災害のありさまをシミュレーションして再現して伝えることは、災害への最大の防御になると改めて感じた。過去の悲惨な被害状況を映像で流し続けることも、災害への心構えにつながると思う。

○　防災減災報道は、いかに自分ごととして捉えてもらうかが鍵だと思った。「アナウンサーが“初期消火”に挑む」は、アナウンサーのことばや表情にリアリティーがあり、このような報道のしかたはとても評価できると感じた。一方、「自主防災組織で素早い災害対応を！」、「洪水被害を防ぐ“ゲート操作”担うのは高齢化する地元住民」は年長の方ばかりが登場していて、問題提起としての側面は理解しつつも、あまり身近な話題に感じられなかった。現代の日本では、隣人付き合いが疎遠な地域や、活動がさかんではない自治体もあると思う。これからはより多くの世代に向けたコンテンツ作りが求められるのではないか。

（ＮＨＫ側）

「首都圏ネットワーク」では中高生の防災の取り組みについても紹介していて、そのような話題も伝えることで、幅広い世代に関心を持ってもらえないかと考えている。また、関東大震災100年を機に、学校で行う防災教育にＮＨＫのデジタル教材を活用する取り組みもあると聞いている。これからも、若い世代への届け方の工夫を考えたい。

○　関東大震災100年に関連して、今後どのような形で防災減災の取り組みを展開していくのか知りたい。「特集　地図で見る関東大震災の写真と動画」のホームページは、１枚１枚の写真にコメントが付けられていて、ＮＨＫの熱量を感じた。地図上に写真や動画を表示する形式はよいと思うが、地図がやや操作しづらく、全体像も把握しづらかったので、写真や動画を検索できる機能があるとよいのではないか。６月１４日(水)の「首都圏ネットワーク」では、関東大震災当時の実際の震度を伝えていた。自分の居住地域の震度が想像以上に大きく、災害に対する備えへの意識が芽生えた。ただし、コメントがやや表面的で、踏み込みに欠けるように感じたので、今後より深く扱ってほしいと思った。また、ＳＮＳの「ストーリー」や「リール」機能を活用して周知することで、より認知が広まるのではないか。

（ＮＨＫ側）

100年前と現代を比較するコンテンツなどを展開し、幅広い世代に響く取り組みをしたいと考えている。指摘されたホームページの操作性の課題を改善するため、現在、検索機能の整備を進めている。

○　ＳＮＳで「大雨の備え　非常用持ち出し袋も“衣がえ”暑さ対策グッズを！」という企画を目にした。非常用グッズの季節による入れ替えという視点は盲点だった。このような情報は今後も発信を続けてほしい。

○　新潟局のニュース番組で、火災の報道とあわせて防火対策について紹介していた。視聴者の関心が高い瞬間を逃さずに伝えていて、とてもよかったと思う。水害に関しても地域に根差した呼びかけをしていると思うが、ほとんどの視聴者は水害への危機感がないように感じるので、その溝を埋めるための工夫に期待したい。

さいたま局が取材した、母親の視点に特化した防災情報に大変共感した。対象を絞ることで、深く伝わる情報になっていたと思う。ＮＨＫでは多くの防災情報を伝えているが、すべての番組を最後まで見てもらうことは難しいと思うので、短時間に再編集して伝えることも考えてはどうか。

新潟局のミニ番組「ちょこっと防災そなえドキ」は、必要な情報をコンパクトにまとめて積み重ねている点はよいが、過去の放送回をアーカイブとして必要な情報を探しやすくする必要があると思う。現在はホームページにランダムに動画が並んでいるので、内容によってカテゴリーを分け、目次を作ってはどうか。また、「ちょこっと防災そなえドキ」では災害時の体験談の募集もしているが、視聴者のニーズがあるのは、自宅周辺の河川の増水時の様子など、極めてローカルな情報だと思う。身近な災害時の映像も募集し、ハザードマップ上で過去の被害の様子を共有できるようにするとよいのではないか。

また、緊急地震速報の対象地域の中で実際には地震が起きないことがある。どのような仕組みで速報を出しているのか知りたい。地震については、視聴者が投稿する「スクープＢＯＸ」の映像で被害の程度が分かることがあるので、撮影者の危険の伴わない範囲で活用を期待している。

災害報道においては、全国放送で通り一遍の内容を伝えてもなかなか心に響かないと思う。内容や伝え方を吟味して、その瞬間に最も必要とされる情報を伝えてほしい。災害報道でよく見られる同じ映像や情報の繰り返しは、視聴者をテレビから遠ざけてしまうと思う。マルチ編成やデジタルサービスも活用し、地域にとって必要な情報をダイレクトに届ける工夫ができないだろうか。

（ＮＨＫ側）

被災者に向けたもの、被災地以外に全体状況を伝えるもの、ピンポイントに対象を絞ったものなど、さまざまな形の災害報道があり、即座に整理することが難しいこともあると感じている。

○　防災減災も大切な視点だが、災害が起きた後の報道も大変重要だ。千葉県南部はこれまで災害が少ない地域だったが、2019 年の台風１５号では甚大な被害があった。台風発生当時はＮＨＫの報道が十分でなく、期待を裏切られたような気持ちになった。公共放送に最も期待していることは、災害時の対応だ。自治体と協力して、地域性に応じた情報発信をしてほしい。災害時にはテレビよりもラジオの重要性が増すので、各家庭でラジオから情報を得ることもノウハウとして伝えるとよいと思う。また、気候変動に対し、ただおびえるのではなく、環境を変えていく必要があると思っている。千葉県は海に囲まれていて、海洋性プラスチックなどの多様な問題がある。一人一人が問題解決のためにどのような行動ができるかも、あわせて伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

2019 年の台風１５号では、千葉県の広範囲で停電が発生し、

さまざまな自治体、警察、消防に電話取材を試みたが、通信が途絶していて情報を得られず、結果として現地に向かうのが出遅れてしまった。詳しい情報が分からなくても、まずは現場に向かうべきだったと反省している。ラジオの重要性についても改めて強く感じた災害だった。

（ＮＨＫ側）

ライフラインが途絶したときの対応について、定期的に訓練を行っている。災害の程度に応じて情報の伝え方を変えていくことは、台風１５号でも問われた課題であり、教訓を忘れないようにしたい。

（ＮＨＫ側）

災害の情報をどのようにして集約するのか、大きな課題だと感じている。現状ではなかなか実現が難しいが、将来的には、自治体などが発信する情報が一元的に集まり、誰もが取り出すことができ、また、メディアが分かりやすい形にして伝えられるのが理想だと思う。体制を整えるのにはさまざまな課題があるが、現状の改善に向けて取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

数年かけて、国土交通省、東京都、ケーブルテレビの河川カメラの映像をリアルタイムで受け取れるようにしてきた。徐々にきめ細かく伝えられるようになってきているが、最近の豪雨は局地化していて、どのように伝えるのかが課題だ。デジタルサービスなども駆使し、工夫して発信していきたい。

○　６月１４日(水)の「首都圏ネットワーク」で、館山市立博物館で行われる企画展「関東大震災と館山」を知った。ぜひ見に行きたい。

○　６月１７日(土)に山梨県内のメディア各社が集まり、「やまなし防災減災フェス」が開催される。甲府局を中心に県内メディア各局が協力して、さまざまなイベントを行うようだが、影響力のある大切なイベントだと思っている。

＜放送番組一般について＞

○　５月２２日(月)の「首都圏ネットワーク」を見た。「みんなのおかえり天気」のコーナーで、さいたま局と中継で結んで「さいたま市浦和うなぎまつり」を紹介していた。さいたま局の一角に置かれた目隠しパネルがスマートで、その前に置かれたうな重も引き立って見えた。先日さいたま局を訪ね、リニューアルされた１階のスペースを見た。明るく親しみやすい空間に生まれ変わっていて、立ち寄る人も増えるのではないかと感じた。これからも「みんなのおかえり天気」コーナーで、さいたま局から魅力的な中継をしてもらいたい。番組キャラクターの「しゅと犬くん」と黒田菜月気象予報士のコンビワークにも期待している。

（ＮＨＫ側）

さいたま局のお客様スペースを改修した。お客様にいかに気持ちよく過ごしていただくかという視点で、今も改善を続けている。

○　５月２４日(水)の「首都圏ネットワーク」を見た。新型コロナウイルスの影響による人手不足に対応するため、フィジーから人材を確保する羽田空港の取り組みを紹介していた。日本中で外国人の人材確保が必要な時代なので、手本になるよい事例だと思った。

（ＮＨＫ側）

千葉県内には多くの外国人が暮らしている。千葉局では、外国人に向けて災害時のノウハウを伝える取り組みなども予定している。

○　５月２４日(水)の「首都圏ネットワーク」を見た。「ペロブスカイト太陽電池」という、薄く折り曲げることができる次世代太陽電池を紹介していた。日本のエネルギー問題の解決に向けて、期待を感じさせる内容だった。

「首都圏ネットワーク」は価値のある内容を伝えていると思うが、関東１都６県向けの放送なのか、それ以外の地域でも同じ内容を放送しているのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

「首都圏ネットワーク」は、午後６時３０分まで関東１都６県向けの放送で、甲信越地方は入っていない。甲信越地方では、その時間帯に独自の県内向け放送をしている。午後６時３０分からは、東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県向けの放送となっ

ている。時間帯によって該当地域に向けた話題を伝えている。
ＮＨＫプラスでは居住地域を越えて視聴できるので、活用してほしい。

○　６月５日(月)のとちスペ　選「たくさんの愛をこめて～白血病の少女がＳＮＳに託したもの～」(総合 前2:20～2:47 栃木県域)を見た。白血病で余命１か月の宣告を受けて 2020 年に亡くなった、宇都宮市の女子高生を取り上げていた。女子高生が発信したＳＮＳが多くの人々の共感を呼び、勇気を届けていて、改めてＳＮＳの影響力の大きさを感じた。

○　６月９日(金)のとちスペ「とちぎグルメ部スペシャル！～夏だ！キャンプだ！アウトドアでクッキング！～」を見た。雨のため屋内での収録となってしまい、アウトドア感がなかったのは残念だった。トマト農家を訪ねるコーナーで、アナウンサーがトマトを口に入れる瞬間だけマスクを外し、その後はすぐに着用していた。新型コロナウイルスの５類移行後は、そのような対応をテレビで見ることは少なくなったと思う。おいしさは表情から伝わってくるので、わざわざマスクをする必要があったのか疑問に感じた。

（ＮＨＫ側）　取材先の方のマスク着用に合わせて判断するなど、ケースバイケースで対応している。

○　６月９日(金)の茨城スペシャル「釣りびと万歳▽春の訪れ　キツネメバルを誘い出せ！　望月歩　常磐沖」を見た。釣りの経験が浅いゲストが、真摯な姿勢で釣りに挑戦している姿に好感をもった。指南役の“釣り兄貴”が先に魚を釣ってしまうなど、リアリティーのある展開がおもしろく、ユーモラスで的を射た解説のイラストや、キツネメバルを使った料理にも興味を引かれた。茨城県の沖で魅力的な魚を釣れることが分かり、茨城県に住む人たちにとって価値のある番組だったのではないか。ただし、挿入歌のタイトルの表示がすぐに消えてしまうのは残念に感じた。番組視聴後に挿入歌を改めて聴きたい人もいると思うので、どこかで参照できるとよいと思う。

○　６月９日(金)の＃金曜やまなし「天に選ばれし名水の地　山梨　冬・富士山紀行」を見た。元オリンピック競泳選手の萩原智子さんが２月の富士山麓を旅して、富士山と水の関係をさまざまな角度から掘り下げていた。富士山の水には２つの種類があること、用水路がさまざまな使われ方をしていることなど、目からうろこが落ちる内容だった。富士山の美しい冬景色が映し出されていたが、水の音色がとても印象的で、映像よりも音が主役の番組のように感じた。水量を耳で感じられ、１つとして同じ音

がなく、まるでその場にいるような臨場感があった。また、萩原智子さんの飾らない姿が印象的で、コメントも的確で分かりやすく、ファッションも含めて番組によく馴染んでいた。萩原さんの「この環境を守っていかなければならない」ということばは特に印象に残った。地元にいると見過ごしがちだが、改めて富士山の価値を認識できる番組だった。ＮＨＫプラスで全国に配信しているが、世界各国に向けても、世界文化遺産の今を伝える番組として配信してほしい。

（ＮＨＫ側）

前シリーズの「南アルプス紀行」に続き、今回は「冬・富士山紀行」を放送した。春に取材した「八ヶ岳紀行」、夏に取材する「奥秩父紀行」もシリーズとして放送する予定なので、期待してほしい。山梨県の美しい水がどのようにして生まれたのか、これからも取材していきたい。

○　６月１３日(火)の「ひるまえほっと」を見た。「インド人と共生目指す団地」のリポートで、横浜市のＮＰＯ法人の取り組みを紹介していた。インドに親しみを持ってもらうため、ダンス教室、カフェを利用した語学教室、インド料理の提供など、さまざまな活動を行っていた。英語教室の講師をするインド人のサラニアさんが、カフェを通して人とのつながりが生まれ、孤独だった心が変化したと話していたのは印象的だった。ＮＰＯ法人代表の根岸あすみさんは「受け入れようとして受け入れているわけではなく、“同じ地に住んでいるご近所さん”と思えることが大事」と話していて、多様性をありのままに受け入れる社会の実現に向けたヒントにもなると感じた。ただ、日本人とインド人の子どもたちにどのような心境の変化があったのか、子どもたちの意見も知りたかった。

（ＮＨＫ側）

日本人と外国人が相互に必要とし合い、国籍を越えた交流をしている団地を紹介した。頂いた意見はこれからの参考にしたい。

○　５月２６日(金)の金曜カフェとちのき堂「住めば都の高根沢！～高根沢の魅力を全力発信～」を聴いた。らじる★らじるで検索して聴取したが、番組ロゴのブルーの色味が美しく、目を引いた。冒頭で分かりやすく高根沢町の紹介をしていて、県外の人でも番組を楽しむことができたと思う。近ごろはＮＨＫプラスやらじる★らじるなどの普及により、地域放送局の番組を全国の人が見たり、聴いたりできるようになった。これからは、番組作りで地域外に住む視聴者を意識することも必要になるのかもしれ

ない。番組の途中で、ＡＩ自動音声によるニュースが流れたことで、橋本奈穂子アナウンサーの語り口の柔らかさが際立って感じられた。ゲストとアナウンサーの会話にゆったりと耳を傾け、心地よい時間を過ごすことができた。全国のラジオ番組で、地域で活躍している人、輝いている人を数多く紹介してほしい。日ごろから地域の人に密着してエールを送ることが、防災ツールとしてのラジオ利用にもつながると思う。

○　６月１１日(日)の映像の世紀　バタフライエフェクト　選「独ソ戦　地獄の戦場」を見た。昨今の世界情勢から、関心を持って見ることが多い。

○　６月９日(金)のバリバラ「外国人×障害者　発見！おもてなし旅▽浅草ほか」を見た。インバウンドが復活しつつあり、障害のある外国人観光客も少しずつ増えている。日本人であっても、バリアフリーの情報は当事者に届きにくい。このような情報はこれからも積極的に発信する必要があると感じた。

○　６月１３日(火)のハートネットＴＶ「全盲のマッサージ師　浅野菊郎の挑戦」を見た。美容師として華々しい活躍をしていた浅野菊郎さんが、目の病気で視力を失い、マッサージ師という新たな生きがいを見つけ、夢に向けたスタートを切る姿を伝えていた。浅野さんの「さあ頑張ろう。でもできない。また落ち込む。その繰り返しでステップアップできるようにしていきたい」という心強いことばから、どのような状況でも挑戦していくことの大切さを感じ、感銘を受けた。写真やコメントで闘病の様子を伝えていたが、これまでの人生をかけてきたものを失う苦しみは計り知れないことが伝わってきた。マッサージ師としての姿だけではなく、無謀と思われていた“ヘアリセッター”の仕事に再挑戦する様子も紹介していた。お客さんを前にした浅野さんの笑顔はとても印象的だった。一人で日常生活を送る姿には驚いたが、視覚障害者の日常生活にどのようなフォローが必要なのかという話もあると、視聴者が自分ごととして感じられたと思う。また、“ヘアリセッター”という仕事は一般的に知られていないので、より丁寧な説明があればよかった。浅野さんの周囲の人たちの話も聞いてみたいと感じた。

○　南魚沼市で「新・ＢＳ日本のうた」の収録があった。地域で大いに盛り上がっていて、番組の根強い人気を感じた。地元出身の歌手、三波春夫特集の企画も良かった。新潟局が制作の舞台裏や来場者向けイベントの様子をまとめたホームページの記事からも、現場の熱が伝わるとともに、地域放送局との連携も感じられた。若者にも公開放送に参加したいと感じてもらえるよう、より幅広い出演者を起用することを検討してもよいのではないか。

○　ＮＨＫの魅力的なコンテンツを広く知ってもらえるよう、その時々の一押しの番組を紹介するなど、ＰＲに力を入れてもらいたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局

２０２３年５月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１９日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２２年度関東甲信越地方放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。続いて、水戸放送局の取り組みと今後の予定について報告があった。その後、茨城スペシャル「またここで酒造りを～老舗酒造　火災からの１年～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成について説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	尾形　玲子（養蜂家、ひふみ養蜂園(株)代表取締役）
副委員長	泉田　佑子（書家）
委　員	飯島　禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	石塚　　愛（横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト）
	今村　久美（認定ＮＰＯ法人カタリバ代表理事）
	坂内　剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	田中　裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
	轟　直希（長野工業高等専門学校 工学科都市デザイン系准教授）
	中村　敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田　千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜茨城スペシャル「またここで酒造りを～老舗酒造　火災からの１年～」
（総合　４月２８日（金）放送＜茨城県域＞）について＞

○　火災で焼失した酒蔵の再建を目指す浦里昌明さん、美智子さん夫婦のこの１年の歩みを丁寧な取材で描いていた。夫婦や日本酒づくりの職人たち、そして日本酒のファンなど、登場人物それぞれの思いがよく伝わってくるとともに、火災で失ったものの大きさもよく分かった。夫婦の息子が、「火災発生前の家族に戻りたい」と話す場面が印象に残った。前向きにがんばる両親を応援する気持ちが伝わってきて、番組

を見ている側も再建を応援したくなった。このようなよい番組は、ＳＮＳなどで積極的に発信するとよいと思う。写真や動画の投稿をメインとするＳＮＳに、首都圏局のアカウントが開設されている。このＳＮＳは、若い世代やテレビをよく見る主婦層にも人気が高いので、番組の内容を１枚にまとめた画像や予告映像などを投稿すると、ＮＨＫプラスも含めてより多くの人に見てもらえるのではないか。

（ＮＨＫ側）

水戸局では放送やホームページを通して番組を周知した。ＳＮＳでの発信は今後力を入れていきたい。

（ＮＨＫ側）

首都圏局のアカウントは、視聴者との新しい接点として、番組を見てもらう人を増やしたいという思いで開設したものだ。頂いた指摘は現場に伝え、運用の改善につなげていきたい。

○　火災で大きなショックを受けたと思われる夫婦の息子に対しても、しっかりと配慮をして丁寧に取材していると感じた。火災から半年ばかりで酒蔵の再建に向けて動き出した夫婦のスピード感に驚いた。最近は中小企業でもＢＣＰ（事業継続計画）を策定している企業が増えているという話も聞くので、この酒蔵の再建がそれに基づくものなのかどうか気になった。

（ＮＨＫ側）

酒蔵再建に向けての取り組みは、夫婦の努力と周りの人々の支援で成り立っているが、まだ具体的な事業計画の策定までには至っていないようだ。今後の動きについては、継続して取材していきたい。

○　焼け跡から美智子さんの日本酒造りの勉強ノートが発見されたことは奇跡的だと感じた。ただ、このノートは美智子さんの原点であり、「お酒を造るために生まれてきた人」という人物評の裏づけにもなるのなので、もう少し詳しく紹介してほしかった。ライバルでもあるほかの酒造会社の人たちが再建に協力していることはすばらしい。災害にあったときに周りに助けてくれる人がいることは当事者にとって大きな心の支えになると感じた。場面の切り替わりで美智子さんが活動している北海道の風景映像が差し込まれたが、この番組は「茨城スペシャル」なので、筑波山など茨城県らしい風景をもう少し入れ込むとよかったのではないか。最後のシーンで夫婦が互いに造った酒を酌み交わしていた場所について、「酒蔵が建っていた場所」とだけ紹介さ

れていたが、２人が座っていたのは井戸の上だった。この井戸は代々受け継がれてきた大切なもので、井戸の上に座ったことも意味があったように思う。その点について言及があるとなおよかった。酒蔵の紹介で、「国の登録有形文化財に指定され」というコメントがあったが、国の文化財保護制度における「登録」と「指定」は全く違う意味で、「指定され」という表現は正しくないので注意をしてほしい。

（ＮＨＫ側）

文化財の表現に正確でない点があったことは遺憾で反省している。今後このようなことがないよう十分に注意したい。

○　この酒蔵の火災は、茨城県内では大きなニュースとして取り上げられていた。厳しい状況ではあるが、美智子さんの明るく前向きな表情を見て安心することができた。俳優の吹石一恵さんの落ち着いたナレーションが、番組のよい雰囲気を作り出していたと思う。再建にあたり、井戸やノートが焼け残った幸運や、ほかの酒造会社をはじめとした人と人とのつながり、そして美智子さんの明るさなど、いくつかの要素が大きな役割を果たしていると感じた。これらは、さまざまな災害から復興するのに共通する重要な要素だと感じた。この酒蔵は鬼怒川水系の軟水を使っているという紹介があったが、軟水を使うことでどのような特徴が出るのか、その魅力を伝えてほしかった。夫婦の息子は受験を控えた時期に火災にあってしまったが、両親の背中を見ながら前を向いて着実に歩みを進めていて感心した。その中で、「火災発生前の家族に戻りたい」という息子のことばが印象に残った。東日本大震災のときも同じような感情を抱いた人が数多くいたことが思い出された。この酒蔵の再建については引き続き取材して伝えてほしい。

○　「またここで酒造りを」は、現在の家族の状況を象徴する「火災発生前の家族に戻りたい」という息子のことばとも一致する印象的な番組タイトルだと感じた。被害の記録を残すために消防の了解を得て撮影したという火災発生中の映像があったが、火災の恐ろしさがよく分かる衝撃的なものだった。火災のあとに地域の人たちが片づけを手伝う様子などから、この夫婦が地域に根ざし真摯（しんし）に酒造りをしてきたことが理解できた。応援してくれる人がいるからこそ、この夫婦は酒蔵の再建に向けて歩みはじめることができたと感じた。せちがらい世の中ではあるが、人と人とのつながりを大切にし、再建に向けて努力する夫婦の姿に勇気をもらった。夫婦の酒蔵は鬼怒川水系の軟水を使用しているとのことだが、美智子さんが設備を借りている北海道の酒造会社が使用している大雪山系の地下水は軟水なのか硬水なのかが気になった。また、夫の昌明さんにもう少し焦点を当ててもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

夫婦の息子は進学を控えた大切な時期だったこともあり、取材の回数を減らすなどなるべく負担のないよう気を配った。北海道の酒造会社が使っている地下水は硬水だ。日本酒に関心の高い視聴者もいるので、このような情報をもう少し詳しく伝えてもよかったかもしれない。昌明さんは美智子さんに比べると寡黙な性格で、積極的に話す美智子さんの印象が強くなってしまったかもしれないが、このような性格の違いもこの夫婦の魅力だと感じている。

○　大切に守ってきた酒蔵を火災で失ったことは、夫婦にとって想像を絶する喪失感があったことと思う。さまざまな葛藤がある中で、再建に向かい歩む姿に勇気をもらった。この酒蔵や夫婦が地域の人たちから愛されてきたことがよく伝わってきた。番組全体を通して使用されている音楽が映像と合っていてよかった。「多くの支援を受け、立ち上がります」というナレーションとともに流れた音楽は、酒蔵を再建しようとする夫婦の思いを感じさせるものだった。地元ケーブルテレビ局からの提供映像も使用されていたが、効果的な連携で好感を持った。多くは語らないものの、夫婦が仕事をする姿から情熱や前向きさがよく理解できた。構成がすばらしく、温かな気持ちになるよい番組だった。

（ＮＨＫ側）

火災にあう前の貴重な映像を地元のケーブルテレビ局に提供してもらうことができ、番組を制作するうえでとても助けられた。今後も良好な関係を継続していきたい。

○　火災に遭いながらも前向きに生きる夫婦の姿に感銘を受けた。同じ銘柄の日本酒を造り続けることを大切にしたいという夫婦の思いがよく伝わってきた。「またここで酒造りを」という番組タイトルにもあるように、同じ場所で新しい酒蔵を復活させることが夫婦の目標なのだと感じた。新しい酒蔵が設計段階にあるという紹介があったが、もう少し詳しい状況を知りたかった。日本酒についてあまり知識を持たない視聴者にとっては、日本酒造りの大変さは想像しにくいと思う。軟水を使うか硬水を使うかなど、夫婦が造る銘柄の味を再現するためにどのような要素が重要になるのか、もう少し丁寧に説明してほしかった。酒蔵を復活することの難しさや、日本酒の奥深さについて誰もが理解できるような説明があるとなおよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

若い世代の日本酒離れが進む一方で、海外では日本酒が人気になっていることを踏まえると、日本酒の魅力や奥深さについて、もう少し詳しく伝えてもよかったかもしれない。

○　酒蔵の再建に向かって歩む夫婦の心の変化が丁寧に描かれていた。番組の冒頭と最後のシーンにつながりがあり、連綿と続く日本酒文化の伝統を感じ取ることができた。被災をして厳しい状況に置かれても、気の持ちようと周囲からの支援によって前を向いて生きられることが示唆された良質な番組だった。夫婦が造ってきた日本酒の銘柄をきっかけに育まれた、人と人とのつながりを支えにして再建に向かうという内容は、銘柄に込められた思いと一致していて感動的だった。夫婦の息子が率直な思いを打ち明けた場面が印象に残った。火災への備えは木造の有形文化財が抱える大きな課題の一つだ。厳しい言い方になるが、火災の発生は管理上の問題かもしれず、すべての製造責任者である杜氏（とうじ）は、地域の宝でもあった有形文化財の蔵を焼失してしまったことは無念だっただろう。夫婦の心境や、地域の文化財としての酒蔵の意義について、もう少し掘り下げてほしかった。長期間にわたり丁寧に取材をした番組で評価したい。

○　火災の原因はボイラーにあったとのことだが、もう少し説明がほしかった。有形文化財の酒蔵が焼失してしまったが、再建にあたり同じような建物が作れるのだろうか。今後の見通しを改めて伝えてほしい。大きな災害で家族や家などを失った人は数多くいるので、この夫婦の姿が、被災当事者が前を向いて生きるための一つの好事例になるとよいと思う。日本酒の銘柄のラベルが映し出された場面があったが、広告宣伝につながりかねないと感じた。ほとんどのシーンではラベルが見えないよう配慮されていたので違和感を覚えた。どのような基準があるのかは分からないが、不公平になることのないよう注意してほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫは公共メディアとして、特定の企業や商品について広告・宣伝につながるような取り上げ方はしないことを基本としている。一方で、番組の編集上、情報として必要不可欠である場合には、企業名などを紹介することもある。夫婦の銘柄のラベルには「結」という漢字のデザインが施されている。このデザインは、夫婦が人と人とのつながりに助けられ前を向いて生きるという番組の内容に合致しているだけではなく、まさに夫婦の思いを表すものだ。もちろん広告・宣伝につながらないよ

う必要最小限ではあるが、映像で示す必要があると判断した。

○　人が生きていくことの本質とはどのようなものであるのかについて考えさせられる、示唆に富んだ良質な番組だった。地域と酒蔵の関係性や、日本酒をきっかけにした人と人とのつながりなど、興味深い内容が散りばめられていた。番組全体の構成やカメラワーク、ナレーション、音楽の選曲など、どれもすばらしかったと思う。次はどのような展開になるのかと興味を引かれ、番組に引き込まれた。ナレーションの語り口は夫婦に寄り添っていて好感を覚えたし、音楽の選曲も申し分ないと感じた。ただ、酒造の再建を応援するメッセージが寄せ書きされた色紙が紹介されていたが、酒造のロゴがあしらわれた色紙が何枚かあり少し違和感を覚えた。取り立てて紹介しなくてもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

水戸局のカメラマンの提案がこの番組の制作につながったこともあり、カメラワークにはこだわった。頂いた意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　４月２１日(金)の首都圏ネタドリ！「博物館＆美術館が変わる！～広がる文化・芸術の楽しみ方～」を見た。博物館や美術館はあまり身近ではないと思われがちなので、番組で取り上げたことを評価したい。ただ、タイトルにあるような楽しみ方というよりは、課題の紹介が中心だったように思う。また、ゲストの大学教授の専門分野にやや偏った内容だったと感じた。

○　４月２１日(金)の知るしん　信州を知るテレビ「大嫌いだけど大好きな場所で～Ｒｅｏｌ初凱旋ライブまで～」を見た。動画投稿サイトなどで活躍し人気を集めるシンガーソングライターのＲｅｏｌさんを取り上げていた。Ｒｅｏｌさんを通して、現代の若い世代の空気感を映し出していたと思う。Ｒｅｏｌさんは、子どものころに父親に連れられてブラスバンドの公演に行ったことが音楽を始めるきっかけになったとのことだ。人生はちょっとしたきっかけで変わるもので、親が与える影響が大きいことを改めて感じた。また、小さいうちに夢中になれることを見つけることは、その後の人生の大きな強みになると感じた。Ｒｅｏｌさんは、父親が亡くなった喪失感から学校に行けなくなったときに、音楽という得意分野があったことが人生の大きな支えになったそうだ。親が子どもに寄り添うことの重要性を再認識させられるとともに、

若い世代にも勇気を与えるとてもよい番組だった。

（ＮＨＫ側）

若い世代に絶大な人気がありながら、インターネットでの活動が中心のＲｅｏｌさんの素顔に迫りたいと考え、若手のディレクターが制作した番組だ。Ｒｅｏｌさんというアーティストが生まれた背景についてもしっかりと描きたいと考えた。若い世代の胸の内や、地域への思いを伝えることができたと考えている。

○　４月２１日(金)の金よう夜きらっと新潟「オープンスクーラーズ！～不登校でも輝くぼくら～」を見た。「不登校」をポジティブなことばで再定義した「オープンスクーラーズ」について取り上げていた。子どもたちの学びや生き方が多様化しているにも関わらず、日本社会がそれに対応できていない現状がよく理解できた。大人たちが責任を持って日本社会を改善しなくてはならないというメッセージが印象に残った。全国放送では若い世代の声に耳を傾ける「君の声が聴きたい」プロジェクトに関連した番組が放送されているが、それを都会のこととして受け取りがちな地域に住む人たちに向け、新潟の現状を示したことは意義があると思う。

平日の昼に新潟県向けに伝えられている「ニュース」のスタジオ背景がリニューアルされ、全国放送のニュースと似たデザインになった。東京のスタジオからニュースが伝えられた直後に地域局からニュースが伝えられることは多いが、視覚的な違和感が解消されてよいと思う。

（ＮＨＫ側）

東京のスタジオと地域局のスタジオの統一感を高めようと、2022 年度から本部の関係部署と連携して準備を進めてきた。４月２４日(月)から１週間、トライアルとして新しいデザインを使用した。ＣＧを活用したもので効果的だと考えているが、技術的な課題もあるのでしっかりと検討しながら進めていきたい。

○　４月２５日(火)の「ひるまえほっと」を見た。神奈川県平塚市での家康ゆかりの地をめぐるツアーについて取り上げていた。平塚にも家康の足跡があることを初めて知り、勉強になった。家康が鷹狩りの拠点とした中原御殿など、さまざまなゆかりの地が紹介されていて興味深かった。平塚市は観光客に楽しんでもらうため、地域の業者と“家康弁当”を作ったり、かつて家康も口にしたとされる「中原酢」の再現に取り

組んだりと、地域の頑張りがよく伝わってきた。今後も横浜局ならではの視点で、地域の取り組みをたくさん紹介してほしい。今回の放送内容をホームページでも確認したのだが、さまざまな色が使われすぎていて文字が読みづらいと感じた。

（ＮＨＫ側）

平塚市が大河ドラマ「どうする家康」と連携し、さまざまな取り組みを行っていることを伝えた。今後も、地域の話題を丁寧に伝えていきたい。ホームページについては今後の参考にしたい。

○　５月１０日(水)の「新潟ニュース６１０」を見た。「暮らし安全安心」のコーナーで、フィッシング詐欺について取り上げていた。迷惑メールが届くことがよくあり、注意が必要だと感じていたところに、今回は油布彩那記者が自身の被害体験を踏まえ、悪質で紛らわしい誘導画面を表示しながら、詐欺につながる流れを丁寧に解説していて参考になった。５月１１日(木)の「新潟ニュース６１０」も見た。「ケーブルテレビ便り」では、佐渡の祭りの担い手の現状について伝えていた。コロナ禍で取りやめていた祭りが再開しはじめているが、担い手不足に悩んでいる地域も多いと思うので共感した。

（ＮＨＫ側）

特殊詐欺に加え、手荒な強盗事件も相次いでいる。新潟局は「暮らし安全安心」と題し、県に住む人たちの生命・財産を守るための情報発信に力を入れている。このリポートは、記者自身が実体験を語ることで問題をより身近なこととして捉えてもらいたいという思いで制作したものだ。今後も視聴者により届くような伝え方を考え、工夫して取り組んでいきたい。

○　５月１３日(土)の「どどどど！信州イチオシ」を見た。サッカーＪ３に所属する信州の２チームが対戦する「信州ダービー」と、佐久市で「ＮＨＫのど自慢」が開催されるという話題を中心に展開していた。信州ダービーでは、前の週に「天皇杯　ＪＦＡ　第１０３回全日本サッカー選手権大会」の試合が同じカードで、１５年ぶりに長野市のチームが勝利していて、松本市のチームも含め、双方の地域は盛り上がっている。タイムリーな話題なうえ、選手の紹介など内容も興味深かった。さらに、それぞれのサポーターの熱量が伝わるようなインタビューがあるとなおよかったのではなか。「ＮＨＫのど自慢」は放送の前日に予選会があることを初めて知った。会場の模様やのど自慢の舞台裏が丁寧に伝えられていた。子どもが行っても楽しめる会場に

なっていて感心した。番組で、「のど自慢の前日に行うイベントは何か」という３択のクイズが出されていたが、「壮行会を行う」「予選会を行う」「飲み会をする」という選択肢だった。「飲み会」だけが浮いていて、朝の番組としては違和感があった。

同じ５月１３日(土)のＪリーグ２０２３　Ｊ３第１０節「長野パルセイロ」対「松本山雅」(総合 後 6:00～6:45、総合ｻﾌﾞﾁｬﾝﾈﾙ 後 6:45～7:30、総合 後 7:30～8:10 長野県域)を見た。午後６時４５分から午後７時３０分まではサブチャンネルで放送していた。サブチャンネルに移行する前から見ていた視聴者はスムーズにチャンネルの切り替えができたと思うが、メインチャンネルがニュース番組の時間帯にテレビを見た人をどのようにサブチャンネルに誘導するのか気になった。画面の右上に「信州ダービー」というテロップが表示されていたが、サイズが大きすぎるように感じた。試合は午後８時より前に終わったものの、放送は当初の予定から１０分延長した。そのために午後８時から放送予定だった「沁（し）みる夜汽車」の長野電鉄を取り上げた回が休止になったのは残念で、延長する必要があったのか疑問に感じた。

（ＮＨＫ側）

「どどどど！信州イチオシ」は、気軽にＮＨＫのコンテンツに親しんでもらうことをコンセプトにした番組で、クイズの選択肢もその延長ではあるが、時間帯と合っているかという指摘は重要であり、今後の番組制作に生かしたい。信州ダービーの盛り上がりも手厚く伝えたが、サポーターの声についての意見は今後の参考にしたい。

Ｊリーグ中継でのサブチャンネルへの誘導は丁寧に行ったつもりだが、もう少し工夫の余地があったと思うので、次の中継に生かしたい。画面右上のテロップが大きすぎたという指摘はそのとおりで、中継の途中でサイズを小さくした。「沁（し）みる夜汽車」は、試合の振り返りなどを伝えることを優先したため、やむをえず休止することとした。スーパーなどで案内できればよかったと思う。

○　４月３０日(日)の小さな旅「下町　人情学生街　～東京　北千住～」を見た。タイトルに興味を引かれて視聴した。オープニングの哀愁漂う趣のある音楽で一気に番組に引き込まれた。河原やビル街、昔ながらの路地など、北千住らしい風景映像がすばらしかった。北千住がかつて宿場町であったことや、この２０年間で大学のキャンパスが５つ、鉄道の路線が５つできたことなど、この地域に対する理解が深まった。若い世代の住民が増え、古くからの町が活性化する成功例だと感じ、参考になった。下町のよさが残る北千住は、上京してきた学生が初めて住むにはとてもよい地域だと感

じた。人助けから弁当店を始めた女性が紹介されたが、昔の下町ならではの人情味を感じることができて安心感を覚えた。人と人とのつながりがしっかりと残る北千住のまちづくりについても知ることができる良質な番組だった。

（ＮＨＫ側）

若い世代の流入で活気が戻る北千住を訪ね、住民たちの人情味あふれる様子とともに地域の様子をお伝えした。「小さな旅」は放送を開始してから４０年が経過した。これまでさまざまな地域を取り上げてきたので、過去の映像も活用して同じ地域の過去と現在の様子を比較するなど、さまざまな取り組みを行っていきたい。

○　４月３０日(日)のＮＨＫのど自慢「埼玉から生放送！▽布施明・長山洋子」を見た。今年度から生演奏ではなくカラオケ音源となったが、生演奏と比較しても遜色はなく、むしろ若い世代になじみのあるカラオケの活用は効果的だと感じた。番組の魅力である司会者と出場者とのやりとりは、予選会も含めたコミュニケーションから生まれてくることを知った。同じ４月３０日(日)に首都圏いちオシ！「ＮＨＫのど自慢　予選会ギュッとお届け！埼玉・羽生市」の放送があったが、予選会を勝ち抜くと翌日の本番に出演できるという、出場者たちの高揚感がよく伝わってきた。予選会が本番さながらに行われていることを初めて知る人も多いと思うので、よい紹介だった。本番の「ＮＨＫのど自慢」から続けて見る視聴者にも飽きさせない工夫が感じられたこともよかった。

（ＮＨＫ側）　本番の生放送だけではなく、予選会の模様も番組で伝えることができた。出場した方にとっても、よい思い出にしていただくことができたのではないか。今後も地域の人たちに喜んでもらえるような取り組みを継続していきたい。

○　５月５日(金・祝)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。新宿の歌舞伎町や北海道の帯広で夜間の観光を活性化させる動きがあることを伝えていた。新しい取り組みだと感じ、刺激を受けた。外国人観光客を対象にした観光は、これからは高品質高収益を目指すことが主流になると感じる内容で参考になった。

○　５月７日(日)のＮＨＫスペシャル「いのちを守る学校に　調査報告“学校事故”」を見た。学校管理下で死亡、または障害を負った子どもの数が 2005 年から 2021 年度で 8729 人に上る実態を報じていた。文部科学省は学校での危機管理方針を定期的に

見直している。一方で、学校で熱中症になり搬送されたというニュースはことしも連日報道されている。学校での事故の現状が、データに基づいて分かりやすく解説されていた。文部科学省が方針を掲げても同じような事故が繰り返されていることは、それぞれの学校の文化や慣習を変えることが簡単ではないことを示していると思う。アメリカでは 1960 年代から対策が継続的に進められているという解説があった。日本もさまざまな対策をしているものの、遅れを取っていることがよく理解できた。このようなテーマは何度も取り上げて社会の意識を高めていくことが重要なので、今後も継続して伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

学校での事故がどの程度あり、なぜ過去の教訓が生かされていないのかについて、現場の記者やディレクターが取材を重ねて伝えた番組だ。継続して取り上げる必要性など、頂いた意見は現場に伝え、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　５月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「お祭り復活元年～にっぽん再生への道～」を見た。人口減少の影響などで、ことしで最後となる新潟県長岡市の「古志の火まつり」を、メタバース空間に残すという取り組みが紹介されていた。全国の地域が抱えている文化継承の問題についてさまざまなヒントが示唆された番組でとてもよかった。

○　５月８日(月)のクローズアップ現代「どうする“集まりすぎる”客　観光地とオーバーツーリズム」を見た。コロナ禍以前より、京都や富士山などでは外国人観光客が増えすぎたことによる環境負荷がたびたび問題になっていた。コロナ禍が一区切りを迎え、外国人観光客が増えてきたいま、人手不足にどのように対応するか試行錯誤する地域の動きが紹介されていた。実際に、想定以上にさまざまな国の人が日本を訪れるようになっており、日本の観光業は激しい変化にさらされている。自治体を含めて対応が後手になっていると感じているので、ＮＨＫには最新の情報をいち早く伝えてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

外国人観光客の動向については「首都圏ネットワーク」などでもここ５年以上にわたり注目している。年間の訪日外国人旅行者数が 2,000 万人を超えたころから、このテーマについてプラス、マイナスの両面で取材をして伝えてきた。コロナ禍で外国人観光客は大幅に減ったが、ここ最近は急増している。引き続き取材を続け、丁寧に伝えていきたい。

○　５月１７日(水)のクローズアップ現代「“誰も助けてくれなかった”　告白・ジャニーズと性加害問題」を見た。やや遅くはあったが、ＮＨＫがこの問題をしっかりと取り上げて伝えたことを評価したい。かなり踏み込んだ内容でメッセージ性もあり、この問題が大きく前に進んだという印象を受けた。これまでこの問題について口を閉ざしていた被害者も出演し、長期間トラウマになっていることを語っていた。しっかりとした取材がなされた内容で、制作者の思いがよく伝わってくるとともに、十分な議論を重ねてできた番組であることも理解できた。番組の制作過程を見えるようにすることが、番組の価値の向上につながると考えている。この番組はそのプロセスが分かるようになっていたのがよい。この点を意識した番組を今後も期待している。

（ＮＨＫ側）

頂いた意見は現場に共有するとともに、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　５月１７日(水)のクローズアップ現代「“誰も助けてくれなかった”　告白・ジャニーズと性加害問題」を見た。初めて取材に応じた被害者が出演するなど、ＮＨＫの取材力の高さに感心した。一方で、ＢＢＣが伝えたことがきっかけで、ようやく日本のメディアがこの問題を取り上げるようになったことには疑問を感じている。キャスターが「私たち」ということばを多く使っていた。「私たち」がメディア全体なのか、ＮＨＫなのか、番組のスタッフなのか、何を指しているのかが分かりづらかった。この問題についてしっかりと取り上げ、報道したことは高く評価したい。

○　５月１７日(水)のクローズアップ現代「“誰も助けてくれなかった”　告白・ジャニーズと性加害問題」を見た。加害者が亡くなり、ＢＢＣが伝えたあとで報道を始めたことは遅きに失した感が否めない。日本のテレビ局は大手の芸能事務所に対して特別な配慮をしているように感じる。忖度（そんたく）などせず、事実を伝えることが公共メディアの役割だろう。報道機関として黙認することは、静かなる共犯者だと捉えられても不思議ではないので、ＮＨＫの役割をしっかりと全うしてほしい。

（ＮＨＫ側）

この問題の取り上げ方や報道する時期などについて、さまざまな批判や意見があることはＮＨＫとして重く受け止めなければならないと考えている。頂いた意見は各現場と共有し、今後に生かしていきたい。

○　５月９日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「小さな願いが届くまで～チャイルド・ライフ・スペシャリスト～」を見た。涙なくして見ることができない感動的な番組だった。小児がんで終末期にある子どもが笑顔でビデオメッセージを残すシーンが印象に残った。子どもたちが短くも人生を全うする様子から、主人公の佐々木美和さんの存在の大きさがよく理解できた。子どもたちの親にも、わが子が生きた意味をしっかりと感じさせる佐々木さんの仕事ぶりに感銘を受けた。佐々木さんはある１冊の本に出会ってこの仕事を目指したそうだ。同じように、この番組を見てチャイルド・ライフ・スペシャリストを目指す人が増えたらよいと思う。佐々木さんの思いやメッセージがよく伝わってくる、すばらしい番組だった。

○　５月９日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「小さな願いが届くまで～チャイルド・ライフ・スペシャリスト～」を見た。取材が尽くされた番組で、やわらかい雰囲気を持つ佐々木さんの芯の強さがしっかりと描かれていた。子どもたちやその家族が取材に応じたのも、佐々木さんの人柄があってのことだと感じた。子どもたちや家族にとって、医師や看護師のほかにチャイルド・ライフ・スペシャリストのような存在が必要であることがよく伝わってきた。深夜に再放送があったようだが、多くの人が目にする時間帯での再放送を期待したい。

（ＮＨＫ側）

多くの好評意見を頂戴しありがたく思う。頂いた意見は現場にも伝えたい。

○　５月１５日(月)の「ニュースウオッチ９」で、新型コロナウイルスワクチン接種後に亡くなった方が、新型コロナウイルスに感染して亡くなったかのように放送されてしまったとの報道を見た。丁寧な取材をしているはずのＮＨＫでなぜこういうことが起きてしまったのか、今後の対策なども含めて教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

現時点では詳細な経緯について調査中だが、放送に関わるものとして重く受け止めている。調査の報告がまとまったところで、今後の対策も含めて改めて報告したいと考えている。

○　土曜ドラマ「正義の天秤ｓｅａｓｏｎ２」を見ている。原作や脚本、出演者の演技がすばらしく、１話完結でとても見やすく興味深いドラマだ。引き続き楽しみにしたい。

○　５月５日(金)の「ふたりで生まれた　あたしたち　～雪国の双子　１年の記録～」(ＢＳ１　後 7:00～7:49)を見た。「金よう夜きらっと新潟」で放送した内容をもとに、全国放送の番組にしたものだ。過疎化が進む豪雪地域での子育ての様子をありのままに伝えていた。多様な子育てのあり方を全国に発信したことは意義があり、高く評価したい。

（ＮＨＫ側）

新潟局の若手女性ディレクターが新潟県津南町の秋山郷に通い続け、記録したドキュメンタリー番組だ。2022 年９月に新潟県向けに２７分の番組で放送したところ大きな反響があり、今回４９分で制作した。地域での多様な子育てのあり方をさまざまな人に伝えたいという制作者の熱い思いもあり全国放送につなげることができた。

○　５月１４日(日)のこころをよむ「食べることは生きること（7）年をとっても、たんぱく質は減らさない」を聴いた。医学博士で管理栄養士の本多京子さんが出演していた。本多さんの話は分かりやすく、内容も興味深かった。５０～６４歳の男性の１日あたりのたんぱく質の推奨摂取量が６５グラムであることを例に、牛肉のサーロインよりも皮のない若鶏の肉のほうがおよそ２倍のたんぱく質が含まれていて、効率的に摂取できることが紹介されていた。聞き逃してしまった部分があったが、ＮＨＫネットラジオ「らじる★らじる」のアプリで放送後にも番組が配信されていて有用だと感じた。テキストもあるとのことだが、アプリ内ではその紹介がなく残念だった。また、テキストと放送内容があまり合致していない回があるのも気になっている。

○　海外でＮＨＫプラスを利用しようとしたが、見ることができなかった。海外でも見られたらよいと思う。

ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮの番組を見た。映像の撮り方や話題への視点が日本国内向けの番組とは異なり、新鮮に感じた。海外の人は、これらの番組を通じて日本のことを理解できると感じた。日本人にとっても、海外の人が日本という国をどのように捉えているのか知ることができるので、日本語の字幕を付加するなどの工夫があるとさらによいと思う。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫプラスは著作権などの関係で、日本国外からは利用できない。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局

２０２３年４月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２１日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、宇都宮放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、とちスペ「１２歳で被災したぼくらの同窓会　～あの日から１２年～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成について説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	尾形　玲子（養蜂家、ひふみ養蜂園(株)代表取締役）
副委員長	泉田　佑子（書家）
委　員	飯島　禎典（株式会社湊與　専務取締役）
	石塚　　愛（横浜市立大学附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリスト）
	今村　久美（認定ＮＰＯ法人カタリバ代表理事）
	坂内　剛至（有限会社ネイチャープラネット代表取締役）
	田中　裕子（さいたま市岩槻人形博物館館長）
	中村　敬太郎（前橋園芸株式会社代表取締役社長）
	吉田　千秋（ひたちなか海浜鉄道株式会社代表取締役）

（主な発言）

＜とちスペ「１２歳で被災したぼくらの同窓会　～あの日から１２年～」
（総合　３月１０日（金）放送＜栃木県域＞）について＞

○　東日本大震災の被災者である齋藤貴浩記者の視点で展開されていく番組構成が斬新で、新しい形のドキュメンタリーだと感じた。手書きのタイトルや本人によるナレーションから、齋藤記者の思いがよく伝わってきた。齋藤記者の仕事の紹介から地元で被災した話へとつながる流れもよく、感情移入して見ることができた。同窓会参加者の話から、震災に対する思いの裏にはそれぞれのストーリーがあることもよく分かった。同級生という関係性だからこそ、話すことができたエピソードも多くあったことと思う。「美談にしないで」という同級生の意見に真摯（しんし）に向き合う姿勢

は、記者、震災当事者、同級生としてすばらしかった。番組の最後の「無意識のうちにひとくくりにしていないだろうか」という齋藤記者自身への問いかけは、視聴者である私たちにもとても大切な視点を投げかけてくれたと感じる。このことばがなければ番組のメッセージも異なったものになっていたのではないか。今後も齋藤記者の視点に立った防災・減災、震災の教訓を広く伝えてほしいと思う。とても意義のある番組だった。

○　震災を取り上げた番組を見ると気持ちが重くなることがあるが、同級生からの「美談にしないで」ということばのためか、視聴後に重く悲しい気持ちにはならなかった。同窓会に来ることができなかった方の声も聞きたいと感じたので、継続して取材して伝えてほしい。

○　齋藤記者のゆっくりとした語り口がよかった。１２年間ずっと抱えてきた気持ちと向き合い番組制作をしたことは本人にとって大きな一歩であり、同じ気持ちを抱えている人にも響いたと思う。「ぼく」という一人称や「ぼくら」というタイトルは、１２年前の小学生だった姿をほうふつとさせたが、「ぼく」を連呼することにはやや抵抗があった。今回の番組を見る前に、同じ題材を扱った３月２７日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「卒業から１２年の春に～石巻・門脇小学校～」を見た。「ドキュメント２０ｍｉｎ.」を見たときには、同級生たちが番組になることを意識して本音で話せていないのではないかと感じ、もやもやした気持ちになった。今回の呼びかけは単なる同級生の齋藤君としてのものではなく、今は記者になった齋藤君としてのものであり、齋藤記者からすればより踏み込んだ取材ができる一方で、同級生からすると話しづらいこともあったのではないかと感じていた。取材者と取材対象者の距離感は一概には語れない難しさがあると思うが、「とちスペ」を見たら自由なおしゃべりの場面が本当に楽しそうで、話が弾んだ様子がよく伝わってきた。収録後に同級生から「美談にしないで」と言われたことが明かされていたが、同級生たちが胸の内を本音で伝えていたことが分かり、歯がゆく感じていたのが解消された。齋藤記者は出席しなかった同級生への思いも語っていたが、彼らに思いを寄せることは大切だと思う。ホームページに掲載されている記事にも素直な思いがつづられており、私たちが美談を求めてしまう姿勢があるとすれば反省しなければならないと感じた。今回このような番組を宇都宮局が「とちスペ」として制作し、放送した意義は多々あると思う。あのときに助かった命が今活躍していることは、大変うれしいことだと思った。

（ＮＨＫ側）

今回は、取材者の視点で展開する“セルフドキュメンタリー”
という手法で番組制作をした。頂いた意見を今後の制作の励み

にしたい。

○　動画投稿サイトの動画にも通じるような素朴な作りで、若者にも見やすかったのではないか。齋藤記者の等身大の感情が移り変わる様子がかいま見え、自分の若い頃のことも思い出された。同級生の「美談にしないで」ということばは、視聴者からは想像できなかったものでとてもよかった。最後に齋藤記者は「生き方を伝えていくために」と言ったが、齋藤記者が同級生それぞれの人生から新しい視点を見いだし、それを伝えたことは意義深いと思った。

○　齋藤記者の「震災がきっかけで記者になった」という話が心に残った。被災した門脇小学校の体育館にあった華やかな装飾がかえって痛々しく見え、一瞬で世界が変わってしまったことを印象付けていた。私自身も震災で被害を受けたが、さまざまなことがオーバーラップして思い出された。５０人のうちの１８人が同窓会に出席していたが、クラスの半分も集まらないことには厳しさともの足りなさも感じた。ほかのドキュメンタリーでしばしば見られるような感動的な場面はなかったが、美談にするな、かわいそうとひとくくりにするなというコメントがあって納得できた。熊本地震で被災経験が役立ったという話は教訓的で、実体験を共有することは今後の防災に必要だと思い、短い時間で取り上げるにはもったいないと感じた。同級生のきょうだいなどには、これから活躍しようというタイミングですべてを失ってしまった人もいたのではないかと思う。そうした視点、エピソードも入っていればさらによかった。全体を通して、従来のドキュメンタリーよりも率直な思いが感じられて、大変よかった。

○　子どもたちが成長し震災当時の思いを語るという形の番組を今回初めて見たが、震災の伝え方にはさまざまな方法があるのだと改めて感じた。戦争を扱った番組などと同様に、風化させてはいけないテーマの１つだと思う。捉え方を変えれば、まだ掘り下げられることがあるということを示していたと思う。番組を見た卒業生の方々がどのように感じたのか知りたいと思った。次の番組にも期待したい。

（ＮＨＫ側）

今回のような“セルフドキュメンタリー”は、生の声を伝えるには最もよい手法だと考えている。

○　小学校の卒業式を目前に被災した子どもたちが青年となった今、自らも被災者である記者が同級生と語り合い、同じ視点に立って記録しようという試みは勇気ある挑戦だと思う。５０人のうち３２人の声は聞けなかったという記者の気付きこそが、ジャーナリズムの原点ともいえる、番組で最も価値ある部分だと思った。今回同窓会

に参加した人は、まさに美談になりそうな、東日本大震災をばねにして自分の目標を達成しつつある人たちばかりだと思った。震災からこれまでの経緯を語ることには間違いなく痛みを伴うはずなのに、多くの人が大人びた話しぶりで、感情を揺さぶられるような本音を語っているとは思えなかった。また、同窓会で母校の門脇小学校に集まるという企画は番組ありきだと感じ違和感を覚えた。震災が発生した母校に足を踏み入れるのに大変なハードルを感じる人もいると思うが、そうした人への配慮があったのか疑問に感じた。また、何人に連絡が取れたのか、来られなかった理由は何か、被災当時のそれぞれの状況やその後の生活はどのようになっているのかなど、同級生の全体的な状況が分かる情報を示す必要があったと思う。齋藤記者には震災報道のあり方に今後も一石を投じてほしい。震災当事者として語ることでどのようなメッセージを伝えたいのか、これから災害報道にどのように向き合おうとしているのか、今回の番組だけではやや伝わりにくかったので、今後の展開に期待したい。齋藤記者が後日執筆したホームページの記事を読んだが、シンプルにまとまっていて彼自身の思いや成長の過程が番組より分かりやすいと感じた。

○　齋藤記者が話していたように、不参加の方の中にこそ、本当の震災の悲惨さがあるのではないかと思う。広島で原爆の悲惨さを語り部が語り継いでいるように、地域放送局も含めＮＨＫには、東日本大震災の語り部の役割を担ってほしい。番組内で齋藤記者の卒業式のかわいらしい映像が紹介されたのはとてもよかったし、齋藤記者が淡々と語っている姿にも好感を持った。１２歳という年齢で命に向き合わざるをえなかった方々に、前向きな生き方を教えてもらえたことはすばらしかった。

○　どうして卒業式というタイミングでこのようなことが起きてしまったのか、つらく涙がこぼれた。齋藤記者の葛藤や悩みがよく分かり、制作者の顔が見える番組だった。今は東北を離れ、あれから地元にかかわっていない人たちの本音や焦りを代弁しているように見えた。葛藤や迷いがあることをこのような形で発信することで、同窓会に参加できなかった人にも震災と向き合うきっかけを作っているように感じた。今後齋藤記者が定点観測を続けることで、実体験を捉え直すことになるし、多くの方々の代弁者の役割も果たすことになるのではないか。心から応援の気持ちを伝えたい。

（ＮＨＫ側）

今回の同窓会は、齋藤記者が現在の仕事と企画内容を説明したうえで、同級生に声をかけた。「自分の発言部分は使わないでほしい」「声やアップを映すことはやめてほしい」という声もあり、十分に配慮して制作した。すべての方の声を伝えられなかったのは残念だが、そのうえで「美談にしないようにしたい」

と自戒の念を最後のシーンに込めた。今回声を聞けなかった方の思いをどのように拾い上げて伝えていくのか今後も考え、継続的に取材していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月２０日(月)から始まった「首都圏ネットワーク」の「通学路あんぜんウイーク」を見た。テレビから流れた交通安全ソングの「てて て！とまって！」の特徴的な歌声とテンポのよさが耳に留まり、それをきっかけに視聴した。歌に合わせたダンスには「かんたんバージョン」も用意されていて、この曲を広めたいという熱意を感じた。交通安全ソングを広めようというイベントの様子も紹介され、放送とイベントの連動はよいことだと思った。視聴者からの投稿をもとに危険な通学路を検証するコーナーには納得感があったが、翌日の放送でも同じような危険性が紹介されていて、バリエーションに欠けると感じた。横断歩道を渡るときの課題や、子どもの挙げている手が運転手側からはどのように見えているのかなど、ほかの視点を取り上げてもよかったのではないか。ＮＨＫでは交通安全についてのホームページや教員向け教材も準備していると聞いたが、それらが活用されて事故防止につながることを願う。ダンス動画の応募がどの程度届いているのかは気になった。

（ＮＨＫ側）

2021 年、千葉県八街市で児童５人が下校中にトラックにはねられる事故があったことをきっかけに、地域の方に危険な通学路の場所を情報提供してもらい、視聴者と一緒に対処法を考えるキャンペーンを始めた。大人や社会が取り組むべき対策がある一方で、まだルールに慣れていない就学したての子どもが事故に遭う確率が高いことが分かり、子どもたちに自ら身を守ってもらえるように、「てて て！とまって！」の歌とダンスを作った。ダンスの投稿は現時点で数件だが、危険な通学路の情報は数百件頂いている。地域の通学路の安全は公共メディアとして息長く取り組んでいく課題だと考えている。指摘を頂いた伝え方など反映していきたい

（ＮＨＫ側）

「てて て！とまって！」は八街市の事故をきっかけに、まず「みんなのうた」で放送したが、１年たった今春もしっかりと

伝えていきたいと考えて放送している。関連の「バーチャル背景」やロゴなど、誰もが自由に活用できるようにしている。歌や情報の掲載ページは制作の経緯とともに全国の地域局に共有しており、４月の入学シーズンと、５月の全国交通安全運動期間の各地のニュース番組で紹介していきたいと考えている。今後もＮＨＫ全体で交通安全に取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫにとどまらず広く役立てていただけるように、教育現場での活用方法なども紹介している。また、南関東１都３県の警察とも連携し、５月の全国交通安全運動期間には警察署でも呼びかけをしてもらう予定だ。ＮＨＫから発信するだけではなく、交通安全につながる動きを広げていきたいという思いで取り組んでいる。

○　４月１４日(金)の＃金曜やまなし「街をデザインする　清里再生への道程」を見た。かつて「高原の原宿」と呼ばれながら今はブームの去った清里で、地元の人を巻き込んで街を変えようとする、デザイナーの中野シロウさんの活動を取り上げていた。住民説明会に参加した人が「訳は分からないが、何十年もよいアイデアが浮かばなかった自分たちに分かるようなことでは駄目だ。分からなくていいのだ」と話していたのが印象的だった。移住してきた中野さんの熱意だけでなく、清里の再興を長年願い続けた人たちの思いがあって動き出したプロジェクトなのだと感じた。清里がにぎわっていたころの映像や、ブームに警鐘を鳴らすインタビュー映像に、当時が懐かしく思い出された。５年後の清里を見てみたいと期待を持たせてくれる番組で、取り組みが動き出した今放送したことには大変価値があると感じた。ただ、番組に登場する清里の方々を、敬称を付けずにナレーションしていたのは違和感があった。

○　４月１４日(金)の＃金曜やまなし「街をデザインする　清里再生への道程」を見た。長年地域に住んでいる方々がずっと解決策を見いだせなかったのに、中野さんが新しい捉え方でいとも簡単に答えを出しているようで、示唆に富んだ番組だった。山梨県に住む人たちの間でも清里の再生は難しいという見方が多いと感じていたが、やり方によっては変えられると気付かされる、とてもよい内容だった。

（ＮＨＫ側）　若手のディレクターが実際に清里の街を訪れ、問題意識を持ったことからこの番組を企画した。ドキュメンタリーでの敬称の付け方や、コメントのトーンを「である調」にするのはケー

ス・バイ・ケースだが、慎重に考えるべきことなので、意見は現場にも伝えたい。

○　４月１９日(金)の＃金曜やまなし「岡島閉館移転　百貨店の未来は」を見た。甲府市中心街のシンボル的存在だった岡島百貨店の売り場縮小、移転は思い切った選択だが、新たな店舗で地元に密着したプロモーションエリアを設けること、高付加価値のものを提供するということには共感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

岡島百貨店の移転、営業再開の動きに合わせて放送した。昨年から地域の課題や魅力を積極的に発信することに取り組んできたが、この番組には特に力を入れた。地域放送の役割や力を意識しながら、さらに取り組んでいきたい。

○　４月１４日(金)の首都圏情報ネタドリ！「歌舞伎町をさまよう子どもたち　“居場所”をどうするか」を見た。児童相談所が運営する「一時保護所」が劣悪な環境であることに驚かされた。施設を管理している行政側の意見も聞けると、今後の改善につながるのではないかと感じた。

○　４月１４日(金)の首都圏情報ネタドリ！「歌舞伎町をさまよう子どもたち　“居場所”をどうするか」を見た。児童養護施設で生活している多くの子どもたちの背景を考えると、子どもにとっての家族の愛情の大切さ、家庭環境の影響の大きさに気付かされる内容だった。問題提起としてはよい番組だったが、「トー横」の子どもたちの世代や、実際にそこにいる子どもたち、その親にまで番組が届いているのか、少し疑問も残った。放送内で「パパ活」「案件」「オーバードーズ」などの表現が頻繁に出てきたが、地域によってはなじみの薄いことばなので、紹介のしかたには注意が必要かと思った。

（ＮＨＫ側）

取材先との関係上、踏み込むのが難しい部分もあり、悩みながら制作した。行政側の意見も聞きたいという意見は、今後同じテーマを扱う際の参考にしたい。ことばについてはもう少し丁寧な説明をするように、今後注意したい。午後７時半の放送ということもあり、親世代を意識して制作したが、子どもたちの世代にこそ伝えるべきものでもある。デジタル展開も含め、さまざまな手法を使って子どもたち世代にも届くよう努めてい

きたい。

○　４月１６日(日)の首都圏いちオシ！「ご当地アイドル　地元を撮る」を見た。海外出身で日本のアイドルのファンになった方の話が印象的で、アイドルも日本の文化として全世界に広がっていることを改めて感じた。番組で取り上げられた４つの地域はそれぞれに個性があり、地域性に合わせてご当地アイドルの活動にもさまざまな工夫が凝らされていることが分かった。それぞれの街で、ご当地アイドル自らが感じた街の魅力をセールスポイントとして活動の中でＰＲしていて、どの街にも行ってみたくなった。関東一円でこのようなご当地アイドルがどのくらいいるのかを地図で示すと、よりよかったと思う。楽しく見られて、地域づくりの切り口として大変参考になる番組だった。

（ＮＨＫ側）

東京の各地域を伝える機会が限られる中で、地域に根ざしたアイドルがいることから、それぞれの地域の話題を伝えたいと考えて企画した。

（ＮＨＫ側）

コロナ禍の苦難を乗り越え、地元に愛されてきたアイドルグループが今も多く残っている。ご当地アイドルの活動の背景には楽しみの創出だけではなく、地域の課題に対する問題意識がある。アイドルたちが地域の課題について、明るく楽しく人々に訴えているということは、今回の番組を通しての発見だった。

○　４月２０日(木)のほっとぐんま６３０「▽桐生のポテト焼きそば　▽雲写真の投稿者に聞く」を見た。その中で放送していた「てれらじお」という企画は、群馬県内の７つのＦＭ局とコラボレーションして、地域の話題をＦＭ局の視点で発信するという内容だった。近隣地域の歴史やその地域ならではの食文化を知ることができるのが新鮮だった。ＦＭ局のアナウンサーの話し方も聞き心地がよく、興味が持てた。群馬県には地元のテレビ局もあるが、首都圏のテレビ局の放送を見る方が多く、地元に住んでいても得られる地域の情報には限りがある。高齢者はテレビで首都圏の情報を知り、地元の情報は新聞で仕入れることが多いが、若い世代には近隣地域の情報がなかなか手に入らないので、すばらしい取り組みだと思った。今後もぜひ進めてほしい。

（ＮＨＫ側）

「てれらじお」は、群馬県内の７つのコミュニティーＦＭと

連携して、毎週木曜日に放送している。地域のニーズにタイミングよく応えつつ、その土地の歴史や伝統文化なども交えて楽しんでもらえるコーナーにしていきたい。災害時に備え、日頃から地域メディアとの連携を深める意味もある。これからもこのコーナーを大切にしていきたい。

○　「第９５回選抜高校野球大会」で、山梨学院高校が山梨県勢初の優勝をし、決勝戦まで毎試合見て高校野球中継のおもしろさに気付かされた。ＳＮＳのメッセージが画面で見られ、一緒に応援している気持ちになれたのも大変よかった。2022 年のヴァンフォーレ甲府の「第１０２回天皇杯全日本サッカー選手権大会」優勝に続き、ＮＨＫが中継するスポーツが、山梨県民に勇気を与えてくれていると感じた。

（ＮＨＫ側）

ヴァンフォーレ甲府の「第１０２回天皇杯全日本サッカー選手権大会」優勝、山梨学院高校の「第９５回選抜高校野球大会」優勝で県内は大変盛り上がった。このような出来事がなくても、ＮＨＫの地域放送を通じて、課題解決のヒントや勇気を届けられるように頑張りたい。

○　「新潟ニュース６１０」の地域を応援するコーナー「上中下越に佐渡（さぁ～ど～）ぞ！」のスペシャル版として、３月１７日(金)に金よう夜きらっと新潟「上中下越に佐渡ぞ！ＳＰ～にいがたｃｏｏｋｉｎｇ～」が公開で生放送された。ふだんはなかなかテレビに取り上げられない地域に光を当てるよい企画だった。料理研究家のコウケンテツさんが県内各地の一押し食材を使った料理を作っていたが、季節や時間の制限から、各地の食材全部を使い切れなかったのは少し残念だった。季節を改め、ほかの地域の食材を使った料理のレシピをホームページで紹介するとよいのではないか。ＳＮＳとの連携もよかったが、やや盛り上がりに欠けていて、イベント時だけでなくふだんからの積み重ねが必要ではないかと感じた。また、「上中下越に佐渡ぞ！」の今年度の新しいテーマ曲のメーキング動画がホームページで公開されているが、とても感動したのでぜひ多くの人に見てもらいたいと思った。今回の動画には芸術性の高いものを届けようという意識が感じられ、大変共感できた。新潟局のホームページは、アナウンサー紹介動画の充実、ページの見やすさ改善など、さまざまな角度からサービスが向上していると感じる。

（ＮＨＫ側）

県内すべての地域の魅力を伝える新潟局の取り組み「３７市

区町村プロジェクト」の一つとして放送した。ほかの地域の食材を使った料理のレシピについては、多くの視聴者からも同様の要望を頂いた。実現に向けた方策を考えたい。ＳＮＳの活用については、体制面の課題があり、あと一歩踏み出せていない。リアルタイムでユーザーの意見が聞けるメリットは認識しているので、課題を乗り越え、少しずつチャレンジを増やしていきたい。「上中下越に佐渡ぞ！」のテーマ曲のメーキング映像は「にいがたＷＥＢリポート」にも公開している。ホームページでも、より多くの方に新潟放送局のコンテンツに触れていただければうれしい。

○　２月１２日(日)の小さな旅「移り住み　集う　～山梨県　北杜市～」を見た。移住者どうしがつながりを深めている様子を見て、私たちの地域も移住者が住みやすい街に変えられるのではないかと気付かされた。

○　４月２日(日)の明日をまもるナビ「ＮＨＫ民放６局防災“いのちとともに守る”」を見た。ＮＨＫや民放のアナウンサーたちが参加した、恐ろしいほどにリアルな避難訓練の様子が紹介されていた。民放との共同企画は、災害時の連携につながると思うので、今後も進めてほしい。

○　４月２日(日)の「ＮＨＫのど自慢」は、2022 年夏に大雨で被災した新潟県村上市だった。支援を頂いた全国の皆様へのお礼を伝え、まだ復興しきれていない現状も知ってもらえる、大変よい機会になったと感じた。予選会の模様を現地で見たが、参加者の情熱に支えられている番組であることを改めて実感した。会場では本番に残る出場者がほんの一握りであることに加え、記念撮影のサービスなどを行っていたのが印象的だった。会場のラ イブ感は大変すばらしく、放送との違いも実感できた。全国放送のハイクオリティーなイベントをもっと地方で開催して、地域の文化の発展に貢献してほしい。

（ＮＨＫ側）

放送後に「にいがたＷＥＢリポート」で 200 組の予選出場者全員の顔ぶれを紹介して、予選会の舞台裏の模様を記事にした。ＮＨＫにとっても地域の人々との距離を縮める貴重な機会なので、引き続き全力で取り組みたい。新潟放送局では、今年度全国放送の公開番組を８本予定している。

○　４月１９日(水)のクローズアップ現代「広がる女性のひきこもり　“孤立”をどう防ぐのか」を見た。女性のひきこもりがテーマで、番組で紹介していた主婦の方の隠れひきこもりなどはもっと多く存在するのではないかと感じた。ＳＮＳ上では、女性が社会の役に立てない無力さを嘆いて注目を集めることがあるが、社会問題だと感じている。

○　４月３日(月)の夏井いつきのよみ旅！「ｉｎ長崎　前編」と４月１０日(月)の「ｉｎ長崎　後編」を見た。訪れた地域の地元の方々の俳句を紹介することを通し、その土地で生きる方々の人生や地域の魅力がよくわかった。俳人の夏井いつきさんと実業家のＲＯＬＡＮＤさんの人情味あるやりとりがとても上手で楽しく、地域の魅力をうまく伝えている番組だと思った。次回の舞台はどこなのかとても楽しみだ。各地方に放送局があるＮＨＫならではの、丁寧に作られたよい番組だと思う。

○　４月１１日(火)のハートネットＴＶ「“しあわせ”の選択　～ＡＹＡ世代のがんと妊よう性～」を見た。ＡＹＡ世代は１５～３９歳と幅広く、さまざまな面で「はざまの存在」だと言われている。ＡＹＡ世代のがん患者やその家族の関心や要望はさまざまだが、結婚、出産に関することの占める割合はとても大きい。番組ではがん患者で「がんノート」という活動をされている岸田徹さんと、がん経験者の妻のえりかさんが、「がん患者同士で子どもをつくるのか」と言われたエピソードを紹介していた。がんの遺伝性など、がんに罹患する理由はすべてが明らかになっているわけではなく、間違った認識を持っている人も多いと改めて認識した。２人に１人ががんに罹患する時代に、このような番組を通して情報を得ることには意義があると思った。教育現場でのがん教育についても扱っていたが、がん患者の子どもたちへの心理的なフォローなどの課題もあるので、今後も番組で取り上げてほしい。番組では、抗がん剤が効いていると医師から告げられ、快方に向かうほど心が離れていったというエピソードも紹介されていて、治療が効果をあげることに素直に喜ぶ人だけでなく、複雑な思いを抱える人がいることに気付かされた。

○　４月１１日(火)の言葉にできない、そんな夜。「第２シーズン（２０）」を見た。気持ちが揺れ動いたとき、ことばのプロの脳内ではどのようなことばが生まれるのかを楽しむ新感覚のエンターテインメントだと思った。昨今、生成系ＡＩの能力が話題になっているが、人間の生み出す表現のすばらしさを改めて感じさせてくれる番組だった。大人の視聴者を想定した内容、時間帯だったが、子ども向けにも制作してほしいテーマだ。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター／首都圏局
番組審議会事務局